

地

域交流研究

年報第16号



都留文科大学地域交流研究センター

2019年度

地域交流研究

2019 年度
年報 第 16 号

目 次

—第 15 回地域交流研究フォーラム—

多様な立場でつながる地域—学生ボランティアの視点から—	1
-----------------------------	---

— 2019 年度（平成 31 年度・令和元年度）活動報告—

I . 2019 年度の活動について [概況]	22
II . 各部門の活動	25
II - 1 . 自然共生研究部門	
II - 2 . 共生教育研究部門	
II - 2 - 1 . 地域情報教育	
II - 2 - 2 . 地域美術教育	
II - 2 - 3 . 地域インクルーシブ教育	
II - 2 - 4 . 社会教育	
II - 3 . まちづくり研究部門	
II - 4 . グローカル交流研究部門	
III . インターフェイスとメディアの活動	48
III - 1 . 第 15 回地域交流研究フォーラム	
III - 2 . 各種講座の開催	
(1) 都留文科大学現職教員教育講座	
(2) 都留文科大学子ども公開講座	
III - 3 . 学部共通科目の開講	
(1) 「地域交流研究Ⅰ」	
(2) 「地域交流研究Ⅱ」	
(3) 「地域交流研究Ⅲ」	
(4) 「地域交流研究Ⅳ」	
IV . 地域貢献活動	54
IV - 1 . 山梨県南都留地域教育フォーラム	
IV - 2 . 都留市放課後子ども教室事業	
IV - 3 . 文大ボランティアひろば	
IV - 4 . 地域交流研究センター・サテライト	
IV - 5 . 市民公開講座	
IV - 6 . 学級づくりの向上をめざす実践講座	
V . 地域交流研究教育プロジェクト	68
V - 1 . 食育つる推進プラン	
V - 2 . 谷二ラボ	

第15回地域交流研究フォーラム

多様な立場でつながる地域
—学生ボランティアの視点から—

2020年1月22日

都留文科大学

多様な立場でつながる地域

－学生ボランティアの視点から－

ボランティア元年ともよばれる 1995 年の阪神・淡路大震災以降、全国的にボランティア活動が盛んに行われるようになりました。都留市でも多くの市民の方や大学生が社会福祉協議会とともに、さまざまなボランティア活動に携わってきました。そのような中で、昨今は大学生の活動内容や様式が多様化しているようです。多様化の実情はどのようなものでしょうか。またこれからのボランティアはどのように変化していくのでしょうか。

本フォーラムでは、これまでの学生の活動と地域のニーズについて考え、今後の地域ボランティア活動のあり方を考えるきっかけを探っていきます。ボランティア活動を行っている方、ボランティアに興味のある方、ボランティアって何だろうという方、どなたでも参加できます。多数の皆様のご参加をお待ちしております。

日 時

2020年1月22日（水）

入場無料

18：30～20：00 ※受付 18：00～

会 場

5号館203教室



申込方法： ①大学ホームページの専用ページ（イベント情報）から申し込む
②QRコードを読み取って専用フォームから申し込む

問い合わせ先

都留文科大学 地域交流研究センター

☎0554(43)4341(内線606) 電話対応時間 平日9:00～16:30



多様な立場でつながる地域 —学生ボランティアの視点から—

堤

それでは、第15回地域交流研究フォーラムを始めたいと思います。初めに、地域交流研究センターのセンター長である竹下先生から一言いただきます。

竹 下

みなさん、こんばんは。地域交流研究センター長の竹下です。今日はこのように大勢の方にご参加いただきまして、ありがとうございます。本当に嬉しい限りです。また日ごろ都留文科大学地域交流研究センターのさまざまな地域の活動にご協力いただき、この場をお借りして感謝を申しあげます。

本年度のフォーラムは、「多様な立場でつながる地域—学生ボランティアの視点から—」というテーマで開催いたします。厚労省の調査では、現在ボランティア活動は、福祉分野のみならず環境・自然保護、伝統文化の継承や芸術の普及それから国際的な支援活動など非常に多様な分野において展開されているようです。平成7年の阪神・淡路大震災では、全国から多くのボランティアが駆け付け支援活動を展開し、改めて国民のボランティア活動への関心が高まったと言われております。今日の学生ボランティアの活動の傾向や特徴から、従来のボランティア活動が担っていた互換的な労働力の提供とはやや異なった多岐にわたる形態や意識の変化を私たちは感じております。若者自らが主体的に自分の能力や経験を社会に生かそうとするからなのか、あるいは学生自身が一地域住民として彼らの目に映る地域の課題について若い感性で主体的に行動しているからなののでしょうか。

こうした特徴は、じつは本学内の部活動やサークル活動といった学生活動についても同様の傾向が見られます。ジャンルが様々で、多様化の動きがございます。運動部、文化部といった従来のくくりからすそ野が広がって、既存のサークル活動の枠を超えた新しい形の学生による様々な活動が年をおって広がりを見せております。おそらくこうした傾向は本学学生に限ったものではないと思います。

一方で、大学としては学生のそれぞれの団体の個性や独自性、自発的な活動を最大限に尊重しつつ、地域の課題・ニーズを学生ボランティアに結び付ける協力体制を築くことも大きな役割であると考えております。今、ボランティア運営の在り方が改めて問われております。そこで、今年度のフォーラムのテーマを「多様な立場でつながる地域—学生ボランティアの視点から—」として、本学と学生、地域がつながりあえる場として平成20年にスタートしました文大ボランティアひろばをはじめ、これまでのボランティア活動を振り返りながら、今後の地域ボランティア活動の在り方や方向性を考えるきっかけを探っていきたいと考えております。今回は、様々な御立場から地域のボランティア活動に携わる皆様と問題意識を共有する場ととらえ、座談会という形式で、お互いに語り合う場としたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

堤

私は、本日司会をさせていただきます本学学校教育学科教員の堤です。よろしくお願いいたします。今日は、本学地域交流研究センターの運営委員を担う教員陣もこの場に参加しております。

次に「文大ボランティアひろばのこれまで」ということで、杉本光司先生にお話しさせていただきます。

杉 本

どうも皆さん、こんばんは。お忙しい中ご参加いただきまして、ありがとうございます。

まず前提として、地域交流研究センターは都留文科大学の所属です。平成 20 年に地域交流研究センターと社会福祉協議会でなにか学生に対するボランティアニーズ、それから学生たちもしてみたいボランティアというものをコーディネートしてみようということで、このボランティアひろばというものを 2008 年 6 月に作りました。「つくしの会」、「Σソサエティー」、「つる子どもまつり事務局」という 3 団体からスタートしました。その後、学内の「work-waku つる」とか「いこいの広場支援サークル (IKI)」、現在は「いこい」とひらがなになっていますけれども、あと「Re:Tsuru (リツール)」、そして、今日も出席してくれておりますけれども「カンボジア支援サークル Plenty」、「つるっ子プロジェクト」、あと「ぷらっとはうす」も最近は参加してくれています。ボランティアひろばは、少しずつ形を変えてきていて、最近は学生も含めて出席者が非常に少なくなってきました。ボランティアに対するニーズがちょっと変わってきたのかな、という話もあり、ここであらためてボランティアひろばを考えてみようということで、今回このフォーラムで取り上げさせていただいております。

いま挙げた参加団体の中でも、「いこいの広場」というのは特殊で、この団体は、ボランティアひろばの中から参加しているボランティアの学生たちを中心に、何かしてみたいな、自分たちの所属を超えて、みんなで集まってなんかプロジェクトを作ってみたいな、ということであまりました。そのあたりのことは、今日代表の佐藤さんが来ておりますので、あとで説明してもらえればいいと思います。こういうようにして現在まで来ておりますけれども、最近の状況っていうと、なかなか活動が多面的になってきたり、開催日が毎週第 4 水曜日の夜ということで特に学生の場合は活動日が重なる、ということが非常に多くなってきて、参加してくれる学生たちも少なくなっている。あとは、地域からボランティアに対するニーズということで、以前はボランティアひろばに来て、説明して、こういうボランティアを募集しているのですが参加してくれないですか、というようなことを告知するような場所でもあったのですが、そういうものもだんだんなくなっているという状況です。今日は、また文大のボランティアひろばというものを新しく生き返らせるために、ぜひ皆さんのお知恵やいろんなご意見聞きながら進めて行けたらいいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

堤

杉本先生、ありがとうございました。ボランティアひろばが学生ボランティアと地域とをマッチングするようなそういう機能として生まれたのだけれども、なかなか最近はあまりそこが活発ではない、どうしたら再生できるのかということをお今日はみなで考えていければな、

というふうに思います。

では、次に、ボランティアをめぐっての学生の変化について、山口先生に話していただくと思います。

山 口

都留文科大学の山口博史と申します。地域交流研究センターで仕事をしております。先ほど、杉本先生の方から、最近ボランティアひろばに集まる学生さんの数がどうも低調であると、若干停滞気味であるという話がありまして、それで、なぜかな、ということをいろいろ大学の中でアイデア出しをしたりしていました。私も最近は実は恥ずかしながら顔を出してはいないのですが、何度かまれにですが、顔を出したりして、その雰囲気は何となく感じ取ってはいたということがあります。

私は、専門が社会学です。社会学で、どちらかというとデータ重視で話をするタイプなものですから、学生の活動はどうなっているのか、ということをもまずは調べてみました。どういうふうに調べたかといいますと、大学は毎年、高校生向けというか受験生向けに大学案内というのを作ります。大学案内は一般に配布されていて、皆さんもご覧になれるものですが、その中に学生のサークル、これはやはり高校生が目をつけるところではあるので、学生のサークルのリストが載ってます。ですので、その学生のサークルのリストを全部ピックアップして、そのピックアップした学生のサークルというのが一体何をしているのかということを一インターネット検索してみました。学生のサークルを発見できたものについてはピックアップして調べてみよう、ということをしてみました。

大体 2015 年のデータでいうと、100 あまりのサークル、部活、その他いろいろがありました。それが、2020 年になりますと、130 弱、だったと思います。それくらいになっていました。数が増えているということは今申し上げましたけれども、その中身の傾向がどういうふうになっているのかということですね。私は、今から学生さんに大変失礼なことを申し上げますが、ひょっとしたらボランティアに対する関心を失ったのか、と最初思ってしまった。というのはやはり、ボランティアひろばというものに、停滞気味ということを知っていたから、どれくらい社会貢献志向を持っている学生さんのサークルがあるかということを一いちピックアップしてみたわけでありまして。しかし、地域交流研究センターで仕事をしていますと、いわゆる社会貢献を全面的に看板に掲げているそういう学生サークルばかりではなくて、例えば音楽をやっているサークルがどちらかに慰問に行ったりする、これは立派な社会貢献だと思うんです。本人たちがそれは、活動の一環としてやっているというそういう認識なので、ちょっと広い概念として、自分たち以外を主な受け手としている学生活動みたいなものをピックアップしてみました。例えば音楽である、写真を撮ってみんなに見てもらう、その他文芸をする、内輪ではないものを、外を意識しながらやっている、そういうサークルをピックアップしてみたということでもあります。

結果です。青い方が 2015 年の結果で、赤いというかだいたい色の方が 2020 年の結果です。最初に、学生の皆さんの名誉をすぐに回復したいと思います。社会貢献志向を持っている学生サークルの割合は、2015 年と 2020 年でほとんど変わりませんでした。ということは、ボランティアとか社会貢献といったものに対して学生さんが興味を失ったわけではない。その次です。自分たち以外を対象にするサークル活動、文芸・芸術・表現一般をさすものですね、これは割合でいうと増えています。ということは、外部志向といえますか、外の人たちとつ

なりたいというそういうサークルの傾向というのは増えているといって差し支えないのではないか。不明というのはインターネットで調べてもわからなかったというものです。青い方が不明が多いのはこれは時間がたっているからよくわからなくなっているということで、まあわからないものはわからないとして見せるよりないな、ということでこういうふうにしてあります。これは割合です。先ほど 2020 年が 130 弱、2015 年の方が 100 あまり、という話を申し上げました。今から実数をご覧に入れます。2020 年の方がサークルの数が増えていますので、例えば社会貢献志向を持っているサークルの数自体が増えた、不明はちょっと置いておいて、自分たち以外を対象としているサークルというの、これもあり増えていた。ということは、学生さんは社会貢献とか社会とつながるということに関して、割合の上からも、実態としても、そこに興味を失ったわけではないだろう。それではどうして、というのが次のクエスチョンになります。それは今日私から皆さんに投げる問いですけれども、私も実はこれの答えをちゃんと持ち合わせてはいないのです。だから皆さんお知恵を拝借できればというのが私の考えです。

まとめますと、変化です。これは、先ほどのグラフには書いていないことで、細かい数字なのですけれども、24 団体、減っています。2014 年から 2019 年の移り変わりで。減っているという登録がなくなっています。で、新たに 43 登録が増えてきたということで、総計すると、100 あまりから 130 弱位に増えた、というようなことですが、見られなくなったうちの 5 団体が、社会貢献志向を持っていた。増えた方の 19 団体が、自分たち以外を対象とするし、9 団体が社会貢献志向を有することを確認できた、ということで、ここでも、驚くべき一致というふうに思うのですが、社会貢献志向を持っている消えた団体と増えた団体の割合ってほとんど同じなのです。ということは、井戸水みたいな感じですけど、学生さんの間にある社会貢献志向というのは、やはりコンスタントにあるのではないか、というふうに考えています。

もうこれで、私のスライドは終わりですけれども、社会貢献志向の学生団体の割合はほとんど変わらない。実数で見ると、自分たち以外を対象とする団体は 45% も増えているし、社会貢献志向を持つ団体は 23.5% 増えている。で、私、今回のタイトルを決めるときに、タイトル決めにも多少関わったのですが、これはいったい何を指しているのか、ひょっとしたらこれは私の考え方が間違っているのかもしれない。量的に増えた割合は変わらない、ということは、これは多様化しているのではないか、というのが僕の見立てです。学生の皆さんの実感とはずれているかもしれない。だからそれは違うといってくださいでもいいかもしれない。地域の皆さんから見ると、そうは言えないといえるのかもしれない。そのあたりはいろいろ教えてください。多様化しているとすると、いろんなグループがいっぱいできるというのが多様化になると思うのですが、そのあたり実態はどうなのかな、というのをあとで教えてくださいなと思います。多様化という言葉の中に込めた意味合いはですね、地域にもおそらくは 2010 年から 2015 年にかけて、もしくはそれ以前から、学生のカバーする、学生団体のカバーする、なんといいますか、ニーズより、より幅広のニーズというのがあるのではないか、というのはずっと思っていて、そのあたり、学生の活動と地域のニーズの間口がどれくらい重なっていて、どこのあたりがうまくマッチングをこれからとっていく必要があるのかなというようなことをこのデータを見ながら思ったところでもあります。

最後にまとめます。学生の社会貢献志向はほとんど変わっていない。活動は、これは仮説にすぎませんが、みなさんあとから検証してください、多様化しているのではないか、とい

うのが私の今日のお話です。どうもありがとうございます。

堤

はい、山口先生、ありがとうございます。ボランティアひろばが衰退したのは、必ずしも学生のモチベーションが下がっているからという事ではないのではないか、ということの問題提起いただいたのですが、みなさんの実感としてはいかがでしょうか。

ボランティアひろばを地域交流研究センターと共同運営している社会福祉協議会のみなさんの問題意識としてはいかがでしょうか。

秋 山

社会福祉協議会の問題意識ということで、順番に一人ずつ説明をさせていただきたいと思います。まず、私からですが、文大ボランティアひろばですけれども、去年の1月に再編を行ないました。それまで、約2年間で、社会福祉協議会の事務の引継ぎがうまくいっておらず、実質参加していなかったという現状がありました。そこで、それに気づいて、昨年度からもういちど文大ボランティアひろばを再興していこうという事で活動を始めています。

去年は1月から10月にわたって文大ボランティアひろばを10回開催いたしました。ただ、10月11月12月に関しては、参加団体がほとんどいっしょらなかった、という現状になっております。そのような現状がありましたので、こちらの方でちょっとどういったニーズがあるのかなということで、各学生サークルに調査をさせていただきました。そこで、例えば「開催時間がちょっと長く感じる」だとか、あとは「開催日時がサークルの定例会と重なっていて出席できない」また、「今の文大ボランティアひろばは活動の報告会になっているのでなかなか活動していない。これから活動したい人を誘いづらい。もっと自分たちの活動をいろんな人にアピールできる場になればいいと思う」また、「内容が現状活動の報告会になっている。お互いに交流・シェアできる場所になっていないのではないか」というようなご意見をいただきました。私の方としては以上になります。次に、遠山から説明をさせていただきます。

遠 山

はい、都留市社会福祉協議会の遠山です。いこいの広場の担当をさせていただいております。いこいの広場とは、先ほど、杉本先生のご説明のなかでありましたように、文大ボランティアひろばから派生しました。実行委員長の佐藤さまを中心に、社会人・社会福祉協議会、そして都留文科大学学生による「いこいの広場支援サークル」からなるメンバーで、いこいの広場実行委員会を設立しました。このいこいの広場の対象者は、18歳以上の知的障がい者の方で、障がいの有無に関係なく地域に住む人たちがみんな楽しく充実して過ごせる地域を目指し、一か月に一度、イベントや企画を定期的に行うプロジェクトになります。

現在のいこいの広場実行委員会では、大学のサークルが「いこいの広場支援サークル」から「障がい者交流サークルいこい」に名称が変わりました。しかし、年々サークルに入会する学生が減少し、月に3回程度大学にて行う会議や、いこいの広場当日の参加数も芳しくない状態が続いております。このような状況の中で、先日会議の際に障がい者交流サークルいこいの学生からある提案がされました。それは、サークルの活動を、いこいの広場に限定せず、ほかの活動もしてみたいというものでした。その意見を聞き、社会福祉協議会としまし

ては、知的障がい者とのかわりだけでなく、地域に住む知覚や聴覚に障がいを抱える人たちで作る団体との橋渡しや、高齢者疑似体験など様々なプログラムを提案できる旨を伝えました。学生のみなさんがたくさんの選択肢を持てるように情報発信するだけでなく、これまでの形にこだわることなく地域の様々な活動に参加できる土壌をつくることも都留文科大学や社会福祉協議会が力を入れていくものだという事を感じました。以上となります。

飯 島

みなさんこんばんは。社会福祉協議会の飯島と言います。私自身はこの文大ボランティアひろばですとかいこの活動に実際参加はしていないのですが、生活支援コーディネーターというものを担っています。これが何かというと、今少子高齢化が急速に進んでいる状況の中で、地域の中で高齢者を中心として全世代を対象とはするのですが、まずは高齢者を中心として、地域の中で最後まで住み続けられるような地域づくりをしていこうというところの事業でございまして、都留市から委託を受けて今やっております。

全体的なお話でいうとニュースとかで聞いたこともあるかと思うのですが、地域包括ケアシステム、介護や住まいや、すべてのところを皆さんで連携をしながら住民を交えて地域づくりをしていこうという事業になります。この中で、私の担っている役割の中では、生活支援体制整備と言って、言葉でいうと難しいんですが、これが何かというと、生活支援や介護予防の部分を強力に推し進めていくことです。誰が推し進めるのかというと、これは住民の方に怒られてしまうかもしれませんが、住民が主体となった地域づくりをしていくなかで、ボランティアが多様化してきている、学生さんの志向の変化がみられるということに関して、私自身もすごく活動をする中で感じております。

ただ、今この都留市の現状の中で何が起きているかということ、やはり高齢化の問題というのは年を追うごとに皆さまの目に留まる機会というのがどんどん増えていくんじゃないかなというふうに思っています。私たちや、例えば都留市においても長寿介護課、高齢者を担当する部門であってもおそらく日々感じている状況だと思うのですが、ご高齢の方、自分の体が動かなくなって来た時に、介護サービス、介護保険のサービスを使うという選択肢が生まれてきます。その前に大変になってくることというのが、ご自身の生活なんですよ。日々の生活を、どのように、営んでいくか、というところが、非常にその体力の低下や歳を重ねることによって難しくなっている。この部分を、やはりサポートをしていかなければいけないけれども、ここに、専門家を投入するというのは難しい。ここに介護福祉士を投入するのか、ここに保健師を投入するのか、ここに看護師を投入するのかってなかなか難しく、全体的な流れとしては、地域の皆様で、支えあっていく、いわば目配り気配りをしていこうというような、緩やかな支えあいづくりを広げていこうと。

その中で、生活支援のニーズ、例えば簡単なことを申し上げますと、ゴミ捨てです。火曜日に燃えるゴミがあると、今までは、100 m 200 m離れたゴミ集積所まで自分の足で持って運ぶことができた。けれども、足腰を悪くしてしまって、運びたいけれど、そこまでたどり着くことが容易ではなくなってきた。こういった事例というのは、おそらく年を追うごとに増えていくと思います。そういったときに何があれば助かるか。ご近所さんがついでに、私が出してあげようとか、そういった心配り、気配りがあったりすると、その方は、ゴミ出しはできなくなってゴミがたまっていって、ゴミ屋敷化するそういった生活環境から、地域の人と協力をして、ある面では見てもらいながら、ある面では助け合いながら暮らすことがで

きる。またお庭があるお宅というのは都留市でも多いと思うんですけども、庭木のお手入れというのを、以前は職人さんに頼んでいた、以前は一緒に暮らしていた旦那さんにやってもらっていた、でももう1人になってしまったりとか、足腰が悪くなってしまって、なかなか庭木の手入れができなくなってしまって、なおかつ、年金というの、限られたお金でございますので、これを業者さんをお願いできるかとなったときに、庭木が荒れ放題になってお隣の家に伸びてくる、お隣の家から苦情が出るということで、地域に暮らしにくくなってしまふ。そのような情景が実際に生まれてきています。

そんなときに、どんな支援があるといいかな、となった時に、職人さんのようなことはできないけれども、枝を落としてあげるとか、そういったことのお手伝いがあればそこのお宅のお庭は保たれてお隣とかのトラブルも少なくなってくると思います。簡単に申し上げると、単純な労働力の補完としてのボランティアというのが、以前は側面としてあったかもしれない。ただ、多様化してきているという部分も否定はできない。けれど、生活支援に関するボランティアニーズというのは、今もこれからも増え続けていくというのは、ひとつあると思います。

私が、一昨年ですかね、都留文の学生さんの中で、ゼミの中で地域の支えあい活動をそのゼミの中でやっていこうという授業を選択された学生さんがいらっしゃって、その授業が終わった段階で、地域で展開をしていきたいね、というお話をしたことがあるんですね。これは市の長寿介護課もかかわってやったのですが、その中で難しさを感じたのは次の点です。学生の皆さんが授業を通してやった活動というのが、地域の住民の方の生活支援に役立った経験から、継続して続けていきたいという思いは学生さんにはあるものの、時間がなかったり、授業の外のところではアルバイトをするという現状があるという点です。その中で、支えあいの活動を定期的に行っていくためには、やはりある程度の活動からの収入が担保されないとなかなか難しいのではないかなというお話が学生さんからあったりですとか、自分たちのこの地域に対する貢献の活動自体が、大学のなにかしらの単位や評価につながるようなことはできないだろうか。そういったお話があったりしました。また、活動場所について、大学の中で拠点となるような場所を整備はできないだろうかというような話がありました。また、この部分に関しても、今まで私たちが、社協として活動をしてきた中で、やはり学生さんの価値観の変化、というのを感じた一面でもありました。

堤

社協の方から、地域のボランティアニーズというのは確かにあるという話をお話していただきました。そもそものボランティアひろばがどういう構造になっていたかということ、まずは、地域の方々のボランティアニーズがあって、そのニーズをボランティアひろばに持ち込んでいただき、そうするとそこにボランティアサークルに入っている学生たちが来ているのでマッチングをしていく場みたいな形でボランティアひろばはいままでやってきたんですよ。それがだんだんと、実は地域のニーズは先ほどあるというお話でしたけれども、なかなかそれが直接上がってこなくなってきたというところがあって、そうすると、ボランティアひろばで参加者は何をするかということ、ボランティアサークル間の情報交換会みたいな感じにだんだんだんだんと性質が変わってきたというところがあります。

でも、先ほど山口先生から提起いただいたように、学生が別に社会貢献のボランティアをやりたくないというわけでもないし、先ほど社協から出していただいたように、必ずしも地

域のボランティアニーズが減っているわけでもない。なのに、どうしてボランティアひろばは衰退の道にすすんでいるのでしょうか。

で、先ほど社協さんにもお話していただいたのですが、さらに、今地域の方でどういうボランティアニーズがあるのかというのを具体的に考えていきたいというのがありますので、本日参加されているみなさんに話をいただいてもよろしいでしょうか。どうでしょうか。

山 口

ボランティアのニーズという事で見てみますと、私都留市内に住んでおります。都留市内を夕方夜になると運動のためにとまって散歩するわけですね。そうすると、しばしば、ゴミが若干たまり気味かなというようなお宅を目にすることがあって、これはどうしたものか、ということで頭を痛めていたりします。

ただそういうのは、なかなか私ぐらいの年代の人がいきなり押し寄せていくとちょっとこう不審者にも見られがちなそういう年代ではあるのですが、どういう形でその手のおそらく潜在化しているニーズというものに声をかけていったらいいのか私見当がつかないということもあります。学生さんはそういうことに関心があるのかどうか、それもちょうと私は様子が分からない。地域のボランティアの人たち、もしくはその社協さんがそういったことをどういう形で僕みたいなところから吸い上げていくような形になっているのか様子が分からない、ということで、なかなかいきなりしゃべりにくいかなと思いましたので、まずはちょっと話をさせてもらいました。

堤

ありがとうございます。他の方いかがでしょうか。

発言者①

すみません。大月でフリースクールをやっています。フリースクールというのは、不登校のお子さんや、あと、大勢の中ではやりにくいけれど少人数では学習しやすいという生徒が来ているのですが、そこを始めて10年目になりました。それで、文大の学生さんには、作った当初からボランティアやアルバイトに来ていただいています。堤先生に教育アドバイザーということで関わっていただいています。

やはり、年齢の近い学生さんが一緒に活動をしたり、サッカーを一緒にやってくれたり、あと勉強を個別で分かりやすく教えてくれたり、宿泊学習と一緒に行って、サイクリングなんかを一緒にやってくれたり、この間は焼き芋大会を、一緒に火をおこすところやなんかを子どもたちと一緒にやったりしてくれたのですが、本当に寄り添ってくれているところが、本当に子どもたちを変える力になっています。

都留文の学生には、引き続き、ボランティアやアルバイトとして、一人の子どもや、青年の未来を切り開いていくために助けてくださいということで、お願いをしたいかなというふうに思っています。

今、社協の方がお話しくださった、ボランティアひろばというのを、実は今年初めて知りました。今までは、学生課の窓口に行って、こんな方お願いしますみたいな感じだったのですけれども、やはり私たちがそういう学生さんに手伝ってもらいたかったら、ボランティアひろばの開催情報など、しっかり発信をキャッチしていかないといけないな、ということ

つくづく思いました。以上です。

堤

はい、今不登校・発達障害のある子どもの学習支援のニーズであったり、社協さんから高齢者の生活支援のニーズであったりというのを出示していただきましたが、他にいかがでしょうか。

発言者②

はい、「いこいの広場」です。よろしくお願いします。いこいの広場は、障がいを持たれている方が、事業所とお家の رفتり来りの生活で、その時相談員をしていたので、「どこかに拠点をもう一つ作ってください」といわれたのがきっかけです。ボランティアひろばの会議で私が呼びかけて、みんな作ろうよという形で、で、その作ったものが、雪だるま式に転がっていき、非常に大きくなってきて、という感じです。

会の中でどんなことをしているかという、僕らが作ってるのは、空間だけです。その空間の中で、障がいを持たれている方もそうだし、ここにいる一般の人、大学の教授、あとは高校生、大学生、そして、私たちの子どもとかも参加しています。その中で、空間を与えるのでみんなでしたいことをしようという、その企画をみんなで立てようという趣旨でやっています。そこから、何が学べるのか、というところが面白いところかな、と思っています。

で、僕は、ボランティアってということに関してはボランティアを受ける側も、何かを提供していくという意識がすごく大事だと思うんですね。ボランティアを受けるだけでなく、で、それは私どもの場合だと空間を提供することで、それぞれ目標を、てんでバラバラでいいので、仲良くなるでも、勉強するでも、料理を覚えるでも、親と子の関係を築くでも何でもいいので、そこからつなげていっていただければいいかなという感じで盛り上がっています。

ボランティアの人数が少ないのは現実です。ただ原因が個の力の問題なのか、それこそ多様化のニーズなのか、というのはちょっとわからないところでもあるのですが、私たちとしては、できることをしていく中で、継続するということだけは決まっているので、あとは突っ走るだけかな、という個人的な感情で動いています。

堤

はい、ありがとうございます。「和」の杉本さんはいかがでしょうか。

発言者③

ボランティアクラブ「和」の杉本ですが、私なりにボランティア広場がどうやったら盛り上がるかということをちょっと述べたいと思います。私も20年近くボランティアをしています。

私は都留市社会福祉協議会には20何年所属しております。そこで最初の5年くらいはよく参加していました。社会福祉協議会とかの集まりがあれば行っていて、なぜ行かなくなったかというのをずっと考えていたのですが、やっぱりね、つまらない。毎回同じようなことばかりやっている。で、毎回テーマが、とかもうやるのが年間に決まってるんですよ。何月には何、何月には何の話し合いをする、表彰式に手を叩きに来いという話まである。誰

かが表彰されるからそのために集まりに來いというような。私どもはお金をもらってとか収入を得てボランティアやっているわけじゃない。反対にちょっと過酷な言い方をしますと、社会福祉協議会のみなさんは給料もらって社会福祉をやっている方なんです。こういう人たちが何にも利益も何にもない、人間でいう本来の心で動いている人たちを動かすことってというのは非常に大変な事だと思う。私も自営業で会社をやっているもので、普段そんなに朝から晩までボランティアのことばかり頭に入れておくことは出来ませんので、それぞれが主体となって、いかにボランティア広場が本当に大きくなって、学生さんも含め一般の方なんかも参加してくれるようなものを作っていくにはどうしたらいいかというのを真剣に考えるとおのずと答えは出るとおもいます。

私は、もう 61 歳になりますけど、私の子ども、私の孫は私とはもう全然考え方が違うんです。ということは今の世代を生きている学生さんとかそういう人たちは私たちとは全然考え方や生き方も違います。そこをよく感じ取ってもらって、どういう人たちがどうしたらボランティアひろばに参加してくれるかっていうことをみんなで考えた方がいいんじゃないかと思います。

堤

はい、熱いお言葉ありがとうございます。他にいかがでしょう。学童はいかがでしょう。

発言者④

学童は、今は、人が足りないんです。真剣に足りないんです。支援員も不足している。ですから、うちの文大附属小の学童では、夏休みとか長期保育のときに、学生サークルの「落語研究会」とか、「かるたの会」に来ていただいている。そうすると、子どもたちの顔が変わります。

ただ、今、学生さんも先ほどお話があったように変わりつつありますね。文大は本当に北海道から九州の方までいろんな方々がいて、昔は、そういう方は簡単に帰省できないからアルバイト、ボランティアをして休暇中過ごす方が多かったのですが、今の学生さんは帰れるんですね。実家に。だから、ボランティアが不足しているということが事実なのです。あと、学生さん、時間がないみたいなんですね。いろいろやっているうえでのボランティアということです。

ボランティアひろばのことは知りませんでした。ですから、ここ 10 何年、地域交流研究センターに問い合わせ、ここの学生サークルにお願いできますか、みたいなことで助けていただきました。多々不足しているので、ボランティアの方、有償のアルバイトの方にも、ぜひ助けていただきたいな、というのが私の個人的なニーズです。今日は、開地地区の協働のまちづくりの方も来ていらっしゃいますけど、何かありますか。

発言者⑤

私は、ボランティアひろばという組織自体をほとんど知りませんでした。ここの地域に生まれて、50 年くらい前は、地域の青年とかジャズ喫茶とかそういう政治的なものがあつた。そういうところで、地域の青年と学生さんがよく交わっていて、いろんな情報があつたわけですね。時代はどんどんどんどん変わってその辺の部分はなくなってきたわけですが、そういう部分で、ボランティアひろばが地域のいろんな組織の方と学生の方との交流の場、

ということなのかな、と思いながらずっと聞いていました。

地域では、少子化高齢化ということでお神楽みたいな芸能自体が消滅しそうな状況があります。つる子どもまつりなどに出向くと、全国からきた学生さんたちの中に子どもの頃お神楽習ったってというような人もいます。要は学生と地域との付き合い、その辺がやっぱり都留や山梨を変えていけるような気がしますので、私は、建設的に将来を見ていきたいなと思います。以上です。

堤

はい、ありがとうございます。他はいかがでしょうか。

発言者⑥

「つるっ子プロジェクト」でつる食堂という地域食堂を行っております。これは、もともと3年ぐらい前に文大のもう卒業してしまった学生さんと3人ほどで始めたプロジェクトなんですけれども、原理は子ども食堂ですね。ただ、直接的に子ども食堂を名乗ってしまえば、そこに参加するお子さんは、行ったらそこは「貧困の家庭」だというように周りから見られてしまう可能性もございますので私たちは、子ども食堂という名前をあえて使わずに地域食堂、それでつる食堂という形にさせていただいております。

この活動は本当に多くの方々のご協力あって、順調にさせていただいております。昨年は、文大の学生さんは5名の参加だったのですが、今年は、非常に多くの1年生が参加してくださって、スタッフだけでも今30名を超えております。東桂地域限定で行っているのですが、これは教育委員会を通して、地域の東桂の小中学校の校長先生に毎月1回必ず、チラシをお渡ししています。そこで情報交換という形でさせていただき参加を募っているのですが、大体平均するとおよそ80名、多い時では100名を超えるような地域のお子様、また、大人の方も来ていただいております。

今、東桂地域におきましては、東桂小学校が大体およそ児童数が330名ほどになりますが、そこにおいても、学童保育に参加されている児童が80名ほどいます。その学童の先生とも協力しながらやっているのですが、大体その学童に来られているお子さんの人数がそのままつる食堂に流れてきているような状況にもなっております。学童の先生とのお話の中では、大体学童で終わって子どもたちが何を言うかっていうと、腹減った、っていうんですね。それで、月に1回、僕たちが6時から8時までの間、そこを補えるような形で食事を通して、食事と、そして、お寺というものがこの地域では非常に多くございますので、お寺はもともとこの形としては寺子屋というものがございまして、私はその原点回帰というものを今図っております。そのお寺の寺子屋というものを構築するためにも、お寺で食を通して学び、遊ぶということも踏まえてやっております。その中でも食事をいただきながら、食事が終わったらお寺の本堂とか境内でひたすら走り回ったり、そこも学校ではクラス単位とかで子どもたちというのは遊びの枠というのは限られてしまっておりますが、ここのお寺に集まった場合では、そのクラスというものの、また学年というものも超えて、いろいろな子どもと、趣味の合う友だちどうして遊びます。そこに学生さんが入って、監視をしたりもそうなんです一緒に遊んだりとか、そういう多世代コミュニティや、大人は大人で学生さんにカフェアートというものをやってもらって、カフェを提供して、大人は大人で憩いの場というものを、そこでお母さん方の憩いの場を作らせていただいております。

あと、教育格差というものがどうしてもこの地域ではありますので、プログラミング教室ですとか、そういったものを先進的に取り入れていく、そういった学びの場も必要かなと思っています。いろんな方がそういう場に参加することによって、参加しやすい状況、そこに行けば食べられるだけでもいいですし、そこに行けば遊べる、楽しい、学べるとか、何でもいいのでとにかく人が参加しやすい状況を目指してやっております。

割合的にはやはり子どもが大多数になっております。本当は高齢者ですね、私も地域のお寺の副住職をしている立場ですとやはりあそこのご家庭は今独居のご高齢の方が住まわれているとかそういったことはみえてくるのですが、本当はそういった方にも来ていただきたいのです。でもやはり今、開催時間が夜となっておりますので、なかなか夜の時間ですとご高齢の方は参加しづらい。そういった状況もございますので、改善点として、今度はお昼に、大人向けの食堂とかそういったことも本当は考えていかないといけないのかなというふうに思っています。あくまでこれは、基本的にやはり学生主体でこの運営をしておりまして、企画においても、毎週1回学生が集まってミーティングをして、そこで次の事業の提案や、これやりたいあれやりたいというようなことを主体的に学生さんがやって、それを大人が考えていくというようなスタイルにしています。その学生さんのアイデアをつなげるというもの、これから僕たちのニーズとしては必要なのかな、というふうに考えております。以上です。

堤

はい、ありがとうございます。とにかく地域に多様な学生ボランティアのニーズがあるということは確認できました。あと、ボランティアひろばを必ずしも介さずに、学生ボランティアを立ち上げていっている団体さんもいるということも確認できました。あと、私が顧問をしているいこいの広場など、立ち上げ当初は盛り上がりがあったのですが、だんだんだんだんと時間がたってくるにつれて、ボランティア数が減ってくるとか、そうした移り変わりの状況も共有できたかなというふうに思います。

あとは、学生の生の声も聞いておきたいのですが、いこいの広場の学生スタッフさんはいかがでしょう。

発言者⑦

個人的な自分のその意識と自分の周りのことについてしか話せないのですが、ボランティアをやりたいという学生は結構周りにいます。ただ、その気持ちからその行動に移すっていう段階で、なかなかそのきっかけがないように思います。それがあまりボランティアが集まらない要因なのかなと思います。あとは、さっきお話が何回か出ていましたけど、学生はそれぞれやることもあって、学業と、あとはバイトもやらなければいけない。それで忙しいのかなと思います。

発言者⑧

カンボジア支援サークルのPlentyです。ボランティアをしたいという学生の需要は、たぶん普通にあるんですよ。そのきっかけが、サークルで、例えば私たちみたいなカンボジア支援サークルであったり、いこいの広場であったり、あると思うのですが、それが入っても結構地味な活動ばかりで、活動自体楽しくないとかつまらないとか、あと活動日がバイトとかに重なったとかで、来れる人が少なくなってくると思います。実際ボランティアをする人

数の減りもあったり、その幹部だけしか活動しない実態があったりするのかなというのはあります。結構学生はボランティアしたいとかあっても、私たちがそうなのですが、批判的な言葉とか、偽善だとか言われることも多いです。やりたい人もいると思うんですけど、でもそういう目があってできなかったり、あと、きっかけがなかったり、というのもあると思います。

堤

ありがとうございます。今日はサークルに入らずにボランティアに参加している学生も来てくれているので、一言どうぞ。

発言者⑨

僕はボランティアは、去年の2年生の頃からクロボという活動を年間6回、個人としてやっています。ただ、クロボという活動が、単位を貰って免許もらうための活動みたいなものになってるような気が最近しています。なので、今年も去年クロボ一緒に参加した子に、「ボランティア人数足りないからちょっと来てくれない？」と、3回ぐらい誘ったのですがだれからも連絡がこず、結構僕の学年は30名近く支援の免許の課程を取っている人がいるのですが参加者はゼロでした。あと、先月、いこいの広場さんのみんなで作る音楽会に個人ボランティアとして参加させていただいて、その宣伝も一応やったのですが反応はありませんでした。自分からやりますという連絡が結構少ないな、っていうのは僕もやはり感じています。

やはり聞くと、みんなすごく忙しいとかハードスケジュールの子が結構多いように感じています。やはりバイトをやっていないくても、遠方通学の子が多かったりとか、八王子から来ていますとかすごいなと思うのですが。とりあえず何かこうやりたいという気持ちを持っている子もいるのですが、サークルを掛け持ちしている子も多いし、いわゆる授業の空きコマにちょっとバイト行きますという子もいたりするのに、僕みたいにサークルを何もやっていないしバイトもやっていないし、あと後期ちょっと授業が少ないのでちょっと別の科目潜ってみようみたいな子がほぼいないわけですね。なので、そういう中の環境という面でもすごく変わってきているのではないのでしょうか。

あとすごく個人的な見解ですけど、サークルというものに入ってしまうと、その活動に毎回参加して、ずっと続けなければならないという義務感というのもあってサークルにはあまり入りたくないなということを考えている人も多いのではないかと感じています。何となく、その気持ちはわかるのですが、「とりあえず1回でもいいからちょっと覗きにきてみない？」というのが僕の本心というか、「1回でもいいからちょっと来てみない？」という1歩をちょっと踏み出してみるというのが最近自分の周りには少ないな、というのは感じています。

堤

はい、学生の声も聞けたところで、次に、ボランティアひろばをこれからどうするかというところを議論したいと思います。今のボランティアひろばは、学生と地域のニーズっていうのがマッチングする場にはなれていません。時代が変わったところで、ボランティアひろばを、さっき話してくれたようにサークルにあまり入りたくないけれどボランティアの意識があるという個人も参加できる場にしていこうという課題もあるかと思います。

短い時間ですが、これから、10分ほどで、4つの小グループで、マッチングの場として大学がどういう場を作るとそれぞれの地域の方が学生ボランティアのニーズを持ち込みやすいのか。あるいは学生の方は地域とつながりやすいのかというのをちょっと議論してみただけですでしょうか。

----- 話し合い (10 分間) -----

堤

はい、盛り上がっているところすみませんが、10分経ちましたので。各グループで出てきた声を、全体で共有させてください。

グループ①

失礼いたします。ここのグループで話しておりまして、いまこれだけソーシャルネットワークが進んだ世の中になっておりまして、学生さん同士、僕もそうですけれども、スマホに僕も依存しております。連絡ツールとして、そのSNS等を使いながら、学生のコミュニティを図るというのも非常に大事なのですが、実は、僕たちこのつるっ子プロジェクト、最初にこのSNSをつかってLINEグループというもののの中でその活動の報告会とか定例会というのをやっていました。そこから、逆に、毎週1回の定例会というものを、学生さんの方からの申し出で、今、実は週1回第3水曜日の朝8時にやることになりました。学生さんの方から集まって、時には寝坊しましたというのもありながら、そこで、直接顔を合わせることで、では次の活動をどうするか、自分たちがやりたいこととかそういったことをどうしてもソーシャルネットワークの中で流れてしまいますので、時にはそこも上手に利用しながら、顔をあわせたコミュニティをつくる。または、食堂自体は月に1回開催しているのですが、そこでも終わった後に反省会をしながら、個人個人で顔を合わせるコミュニティというものを大事にするのは非常に重要と思っております。それとこのボランティアひろばというものも、非常に似ているのかなというふうにも思っております。以上です。

グループ②

こちらのグループでは、学生さんが5人もいるということで、ちょっとその学生さんから意見をいただきました。

まず一つ目が、サークル活動に人が定着していないのではないか、といったところで、4月の1年生の勧誘の段階でサークル自体に最初に結構人は入ってくるとのことでした。ただ実際には、その後、次第に減ってしまう、最終的には定着する人が少ない。それはなぜなのかというと、入ったらイメージと違った、その自分の思っていた目的と不一致だったところで、つまりそのサークルの意義というところがうまく先輩から後輩に伝わってない。たぶんイメージと違ったというところが大きかったというところで、それに対してはやはり実際に入ってみたらイメージと違って地味な活動ばかりだった、華やかな部分が少ないかもしれない。そういった地味な活動だけどそれが長期的に見ればとても大事な事なんだよ、ということをやはり先輩から後輩に伝統として繋げられていけばいいのではないかとということがありました。

また、学生さんの中にはやはりそのサークルに入ると縛りが多いんじゃないか、義務感な

どで大変なんじゃないか、という人と、逆に自分は、サークルの中で責任をもってしっかり関わりたい、という人もいらっしゃいました。やはりその学生さんの中でもそういった意識というものが多様化している中で、私たちのような社会福祉協議会としての関わり、社会人、大学としての関わりというところをもう一度見直す機会なんじゃないかという意見が出ました。以上になります。

グループ③

こちらのグループでは、学童の主体でやっている方、「いこいの広場支援サークル」の方、あとは協働のまちづくりの方、生活支援ボランティアの方、あと社協の皆さんでグループワークを行いました。その中で意見が出たのが、地域の方からのニーズがすごくある、地域の行事に参加してもらいたい、学童のボランティアに参加してもらいたい、それはあるのですが、なかなか移動手段がない、ということで、学生さんが宝地区だったりだとかそういった遠いところに行く手段がない時に、迎えに行くような送迎ボランティアとかそういったものも必要になってくるんじゃないかとか、あとは地域のニーズを持っている方々から、迎えに行くのも必要なんじゃないかというご意見が出ました。

また、大学生とボランティアがマッチする場が欲しいということで、文大にボランティアセンターを立ち上げるのはいかがかというようご意見が出ました。やはり都留市社会福祉協議会ボランティアセンターを立ち上げているのですが、遠い、と。単純に。自転車でいっても20分ぐらいかかってしまう、電車で行ったらお金もかかってしまうし、遠い。そういったところで、なかなか相談に行けない、行きづらいという環境があるので、なら文大にそういったものを立ち上げる必要があるんじゃないかというようご意見が出ました。こちらのグループでは以上となります。

グループ④

こちらのグループでは、学生さん2名を含む8人で話し合いが進みました。まず、地域の方から口火を切っていただきまして、大学の中にボランティア情報を発信する掲示板があるといいねというよう意見が出されました。そしたらやはり学生さんの方からは、そういう機能はあるが、現在は機能していない実態があると。ボランティアってやっぱり本当は自分にとっても大きな活動だと思うというようことで、自分を必要とされるというようあり方がというふうに考えていくと、興味のある人用の専用のサイトを立ち上げるのもいいのではないかというよう意見も出されました。それには工夫として、デザイン性を高くしたり、アプリなんかもいいのではないかと、とかそこをクリックするといいね、ということでポイントがついていってそういうものをためると、例えばなにかお礼につながるとか単位につながるとか、そういう興味が無くてもなにかメリットがあると、学生のボランティアへの興味がそそられて、参加促進につながるのではないかなというよう意見が出されました。そんな会話の中で、かつては大学のホームページのトップページの一角にボランティアというカテゴリーを作っておいていただいて、学生さんが興味があればクリックすると自分の興味関心があるところまで行きつくというというしくみも持っていたよ、なんていうことの意味交換がありました。

あと、ボランティアってやりたい人がやるというようイメージなのですが、でも学生の中に聞いてみると友達でも興味のある人が一定数はいる、多いというようことで、ただ、

継続性というようなことが求められるから、踏み込めないというような課題もある。情報共有できる場が必要だね、という意見が出されました。次には、地域交流研究センターの方にブログで、いろいろな情報を発信しているんだけど、そういうのはどうか、というような投げかけがありました。そんなやりとりの中で、最終的には、多チャンネルが必要なのではないか。やはりあの手この手いくつか複数の多チャンネルを有していることが、この文大の中に必要ではないか、というような意見交換で最後終わりました。以上です。

堤

はい、有益なご意見を沢山出していただき、ありがとうございました。

一番初めのグループから、SNS とあと顔を合わせるということの2つを出していただきました。ボランティアひろばというのは、「顔を合わせる」というところが、大きな魅力や強みではあるんですね。SNS の利用と、顔を合わせるという両方を強化していきたいな、というところはひとつ気づかされたところです。

あとは、サークルに所属している学生も所属していない学生もあるいはサークルを辞めた学生も、あるいは単発でも長期でも、そういうボランティアの多様なニーズを丁寧にくみ取って、それをうまく、こちらのボランティアコーディネートができるような場ができるといいなというのは確かに考えさせられます。そうした場をつくっていくには、今回のフォーラムのように、顔を突き合わせて議論していく機会というのを継続的に作っていくといいのかなというふうに考えさせられました。

あと地域のニーズがあるんだけど移動手段が無い、という話で、ボランティアのボランティアというんですか。学生ボランティアを送迎する市民のボランティアがいる、だからボランティア同士がまたつながっていくと、またできることも増えてくるので、考え方として学生ボランティアが地域と直接つながるというやり方ではなく、間に間接ボランティアが入って、つながるということもあると思うので、そこも少し頭柔らかくして考えないといけないのかなというところを感じました。

最後に、ボランティアには、お金を介さずに、ある意味頼りにされるということを通して、自分の生きがいを感じたりとかという部分がある。そういうボランティアの原点の部分を取り戻すようなことはすごく大事かと思いますので、そういう部分を扱うようなボランティア学習なり、ボランティア養成講座なりの機会をボランティアひろばとセットで、地域交流研究センターと社協でつくっていけるといいのかなというのは、個人的には思いました。

最後に閉会の言葉を、センター長の竹下先生、お願いいたします。

竹 下

みなさん、本当にお疲れ様でした。私もこうして地域のボランティアに直接関わっている地域の方、それから学生さん、そして私たち教員が、こういう形での集まりというのは正直初めてです。直接顔を合わせて思っていることを吐き出せたというのはまずよかったな、と、出発点じゃないかなと思います。

最後に、今年、じつはセンターで1年生に向けて、ボランティア活動というもののアナウンスをしました。本学の場合は学生の9割が県外からという事情がありまして、学生たち1年生はまだ右も左もわからない、まして地域のこともわからない、そういう学生たちが、やはり地域の中でなにか頼りになるものを求める部分もあるんじゃないかと、1年生に入学時

の段階で、ああこういうボランティア活動がいろいろあるんだやってみようというところもアナウンスしたというのにもなにかひとつのきっかけになったんじゃないかなと思います。初動が大事かなと思ひまして、来年度もそのようなこともセンターで考えながらボランティアの形というものをどんどん動かしていけるような、あるいは私たちが気が付いていないところをどこかに委託していくような、そういう活動を展開させなければいけないなと思って、今日は身が引き締まる思いで聞かせていただきました。

今日はこんな遅くまでお集まりいただきましてありがとうございました。

堤

ではこれで終わりにします。本日はご参加いただきありがとうございました。お疲れ様でした。





活 動 報 告

2019 年度

活 動 報 告

2019（平成 31・令和元年度）

I. 2019 年度の活動について【概況】

2003 年に本学に地域交流研究センター（以下、「センター」と記す）が創設され 17 年目を迎えた。センター創設前から本学では、市民や学生、個々の教員によるさまざまな地域交流活動が自主的に行われていた。センターでは、これらの取り組みの蓄積に依拠しつつ、都留文科大学として担うべき事業とそのあり方について検討しながら内実を創ってきた。センター創設時に確認した諸活動の基本的なスタンスは、

- ①大学に対する地域の要請に本学のもつ諸資源を活かして対応し、「地域の大学」としてその役割を担っていくこと。
- ②地域性や実践性の問われる本学の研究・教育の一環として、地域（現場）に赴き、「課題」と取り組む地域の人びとと共同して活動を展開させること。
- ③これらの活動の蓄積を通して、本学も地域づくりに参加し、その一端を担うこと。

である。2018 年、本学が 2 学部 6 学科に再編されたことを受けて組織改編をしたセンターにおいても、その基本的な考えは受け継がれている。そして新体制における活動のあり方を模索しながらも、実質的に取り組みをスタートしたと位置づけられるのが 2019 年度ということになる。以下に 2019 年度のセンター活動を概観し課題とともに総括したい。

まず、「自然共生研究部門」では、都留を中心とする地域（フィールド）で身近な生きものや水文環境、農林業の持続にかんする研究をベースに、学生を主体とした『フィールド・ノート』の発行や各種観察会、公開講座、今後の新たな事業に向けた調査などに取り組んだ。

「共生教育部門」の地域情報教育分野では、地域の小中学校の情報教育全般にわたる支援として「技術科」の授業の担当や市民公開講座としてワークショップを開催した。地域美術教育分野では、大学として地域教育のもつ可能性を活かし深めていくことを目的に、地域の小学校での陶芸体験や保育所と連携したアート体験などを実施した。地域インクルーシブ教育分野では、特別なニーズのある子どもたち（および保護者）への教育・心理的支援とインクルーシブな地域づくりを推進することを目的とし、特別なニーズのある子どもたちを対象にした地域の居場所づくりの活動（「クロスボーダー・プロジェクト」、通称「クロボ」）や特別なニーズのある若者を対象にした「キャリアデザインワーク」などを行なっている。さらに社会教育分野では、都留市内に新たな成人教育の場を創出し、そこに高等教育機関としての本学がもつ学問知をつなぎあわせることを目的とし、センターのサテライトと共同で「つるぶん café」の企画・運営をおこなった。将来的には学習者自らが学習内容を編成するような内発的な活動を目指している。

「まちづくり研究部門」では、持続可能なまちづくりを学生とともにデザインし、地域住民や自治体、地元企業等と連携しながら実践活動に移し、実社会での学びの機会を創出することを目的とした活動を展開した。たとえば都留市谷村町駅の駅舎を拠点とした地域連携に

よるまちづくりプロジェクト（「ぷらっとはうす」）がそうである。

「グローバル交流研究部門」では、多様な人びととの交流のなかで、本学が位置する富士北麓の特性を再発見することを目的に、他大学の留学生との交流プログラムである「あかのみあ・ふじやま」をおこなった。

都留市まちづくり交流センターに設置されたセンターのサテライト（分室）では、大学と市民との交流促進を図ることを目的に、ボランティアの募集や講演会への講師派遣依頼、学生のイベント開催の支援などに取り組んだ。

このほか、本学の学生と地域の現職の教員による「学級づくりの向上をめざす実践講座」や各種市民講座などを開催した。

上記のように、大学近隣の地域を基盤として、本学の研究・教育の特色を活かした地域交流活動が、自然との共生、子どもと教育、社会教育、まちづくりを軸に展開されてきた。これらの柱にそった諸活動が、センターの事業の実質を形作ろうとしているといえる。地域での体験と学問との往還による学びは全国から集まる学生たちの本学での学習に少なからぬ影響を与えうるし、学びの本質を問う試みでもある。本学の開学以来、長い歴史のなかで築かれてきた人のネットワークとフィールドを活かした共通科目の「地域交流研究Ⅰ～Ⅳ」などはこの観点からも重要な科目である。

2019年度の活動を振り返ったうえでセンターの課題として次の4点を挙げておきたい。

まず①センター担当教員（兼任教員）の活動の負担の問題である。先に概観したセンターの諸活動が兼任教員の熱意と超過労働により担われている現状がある。また地域交流活動を実際に行なう場合には市民・学生が参加しやすい平日の夜間や土・日を設定するケースが少なくない。こうしたいわば持ち出しによるボランタリーな活動や運営だけでは、全学の教員の参加が得られたとしても地域交流活動はやがて衰退するだろう。教員の積極的なアウトリーチを支援する環境を整えるためにも、地域交流活動への学内の評価（たとえばFD）や事業を担当する兼任教員への手当など「地域の大学」を掲げる本学の地域交流の実体在即して検討する必要がある。

つぎに②地域交流において重要な意味をもちながらも十分に機能していない事業の立て直しである。たとえばセンターには学生からの要望も多い地域でのボランティアの希望について、都留市社会福祉協議会とのあいだで平成20年から「ボランティアひろば」をつくり地域のボランティアニーズとのマッチングを目的とした取り組みを始めた。しかし教員を含む参加者の減少とともに活動が低迷している。今なおボランティアへの学生の希望は少なくない。センターにとってボランティアとは何か、その理念を検討し共有したうえで、改めて「ボランティアひろば」の立て直しをはかりたい。それは、大学と地域をつなぐ窓口として設置されているサテライト（分室）の機能の見直しにもつながる。センターにとってのサテライト設置の意味を「ボランティアひろば」の立て直しとあわせて再検討する必要がある。

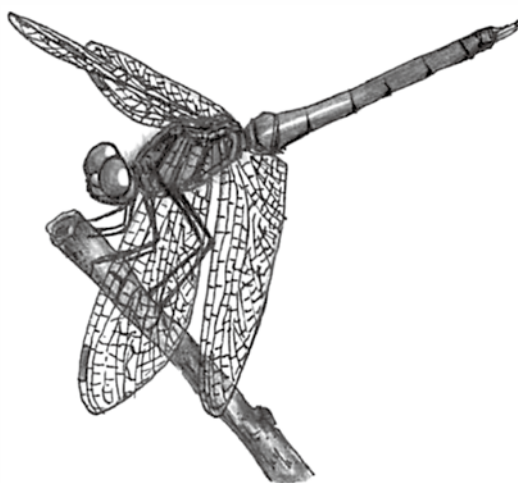
③全学が参加しやすい体制の構築である。センターは、地域での取り組みを重視していた当時の初等教育学科と社会科学の要請のもと創設された経緯がある。「地域の大学」として都留文科大学らしい独自の実践を展開するには、全学の参加と協働が望ましい。しかし現在は狭義の地域貢献（講演や研修など）についても大学全体を視野に入れた橋渡しは十分にできているとはいえない。今後、都留文科大学らしいセンターの活動を展開するには、こうした地域貢献活動を大学全体で担う体制とシステムを構築する必要もある。

④最後に、センターの広報の問題である。センターの活動は今なお広く認知されているとは言いがたい。全学の教職員・学生の協力を仰ぐのなら、センターの活動や理念を積極的に共有していく工夫が重要である。本学のホームページのリニューアルやニュースレターの発行、教授会等での活動の報告を積極的行なうことも今後の重要な課題である。

以上、センターの2019年度の活動を概観し課題を挙げてみた。毎年、多くの活動をしているが、これは教職員・学生・市民のボランティアな参加に支えられている部分が少なくない。本学の諸資源を活用した取り組みには全学の参加が欠かせないが、その仕組みが十分機能しているとはいえないなど解決すべき課題は多い。

こうした課題に取り組みながら、地域との双方向・多方向の交流を生み出しフォーラムとしての機能をもつ拠点として、またつねに地域交流のあり方を問いながら、横断的で継続的な学びと活動へと発展していくセンターを目指したい。

(文責：北垣憲仁)



Ⅱ．各部門の活動

Ⅱ－１．自然共生研究部門

【平成 31 年・令和元年度の活動概要】

2003 年に地域交流研究センター（以下「センター」と記す）が発足すると同時に一部門として位置づけられたフィールド・ミュージアム部門は、センターの再編にともない、2019 年度、「自然共生研究部門」と改称した。この部門の担当は、「フィールド・ミュージアム部門」を担当していた北垣憲仁（地域交流研究センター教員）と、センターの一部門であった「暮らしと仕事部門」において「都留市を流れる水と暮らしと農のかかわりを探るプロジェクト」研究や、十日市場・夏狩湧水群の野外での見学など市民公開講座を担当していた内山美恵子（学校教育学科教員）と福島万紀（地域社会学科教員）の 3 名である。

自然共生研究部門では、教員の専門領域を超えた協働というセンターの特徴を活かし、「地域の自然と暮らし」をテーマに次のような活動に取り組んでいくことにした。

- ・ 調査と研究
 - ①動物の生態研究
 - ②水文環境（水循環など）の研究
 - ③地域の農林業の持続に関する研究
 - ④自然と文化の保全活動
- ・ 収集と保管
 - ①地域の自然・文化資料の収集と保管
- ・ 教育と公開
 - ①自然観察会（ムササビ観察、湧水観察など）
 - ②出前講座
 - ③公開講座
 - ④展示
 - ⑤出版（機関誌『フィールド・ノート』の発行など）

本年報では、3 名の教員が取り組んだ事業の報告を担当別に報告する。

Ⅱ－１－１．動物の生態研究と自然にかかわる教育・展示活動（北垣）

1. 平成 31・令和元年度の活動概要

前年度までの「フィールド・ミュージアム部門」の活動を受け継ぎ、地域の動物の生態研究を基盤に、①自然との共生のあり方を市民との交流事業を通して探ること、②学生と市民との交流により地域の自然や文化を記録・保存・発信すること、を活動のおもな目的としている。以下にその詳細を報告する。

2. 活動の状況

（1）機関誌『フィールド・ノート』の編集と発行

学生が主体となり編集・発行する冊子『フィールド・ノート』を年 4 回発行した。この事

業は2002年に創刊し2018年に第100号を発行した。2019年も学科・学年の枠をこえて16名の学生がこの編集作業に参加した。

参加する学生は、自ら記事の企画をたて、実際に地域に出て観察もしくは取材をし、記事を書く。毎週1度開催される編集会議（平日の6時限に設定）でそれぞれの記事を校正しあい、課題を解決しながら記事を完成させる。2019年度は各号700部を発行し、本学の教職員、学生、市民、全国の読者に届けている。

2019年度の発行状況は次の通りである。

101号：2019年7月発行、2700部（オープンキャンパス用に2000部増刷）

特集タイトルは「いろどる」

102号：2019年8月発行、700部

特集タイトルは「つくる人、うけとる人」

103号：2020年1月発行、700部

特集タイトルは「わたしが見つけた芸術家」

104号：2020年3月発行、700部

特集タイトルは「まちこうば」

8月3日（土）・4日（日）に開催されたオープンキャンパスでは、2日間にわたり『フィールド・ノート』の編集に携わっている学生がキャンパスツアーの担当として参加した。昨年度に続き、オープンキャンパスで『フィールド・ノート』を見て編集に興味をもち、入学後、編集部に入った学生もいる。

地域の自然や人の暮らしをじかに観察し、取材をして記事にするというフィールド・ワークには、ただ冊子の発行だけでなく、座学で学ぶ学問と言語化が難しい体験との往還を繰り返すことでの学びの深化が期待できる。こうしたフィールド・ワークが可能となるのも長い時間をかけて教職員、学生が築いてきた市民とのネットワークがあるからである。

読者から次のような感想が寄せられた（一部を紹介）。

- ☐ いつもありがとうございます。毎号楽しみに拝読させていただいております。そのたびに思わせていただくことは、編集のほとんどのかたが他県から都留に来られている方々かと。その皆さんが「都留」をこんなにも愛してくれている。嬉しくて本当に頭の下がる思いです。皆さんの若くて純粋な感性でこれからも「都留」をいろいろな角度から見えて楽しませてください。
- ☐ 毎号楽しみに読ませていただいています。ていねいにつづられ、地域の方々の生き生きと暮らす様子、自然の姿が伝わり、いながらにして息づかいが聞こえてきそうな感じを覚えます。ありがとうございます。
- ☐ 日頃、見過ごし通り過ぎてしまうようなところに着目し、優しくていねいな時間と対話をしている視点の置き方と、編集やテーマの設定にいつも感心しています。そして毎回書いていますが、写真とデザイン、イラストの個性の出し方が粹だと思います。無理な背伸びや奇抜な派手さのないところがとても良いです。
- ☐ 毎月の記事編集はたいへんと存じます。都留という地方の一都市だけでこれだけの冊子を発行できている例は少ないと思います。大学の冊子ということでもう少し学生の顔が

見えてもよいかと思います。

(2) ムササビ観察バスツアー

現在、全国でムササビの観察会が開催されるようになった。身近な哺乳類でもあり、ほぼ定刻（日没後 30 分ほど）に活動を開始することなどから観察会の入門としても適している。ムササビの観察方法を工夫したのが本学の今泉吉晴名誉教授である。できる限り対象となる動物に干渉せず、お互いの暮らしを尊重しながら観察するというそのスタイルを受け継ぎ、ムササビの観察をとおして地域の自然の魅力や共生のあり方を探ろうというのがこの観察会の目的である。都留市の今宮神社をフィールドとし、氏子総代とも連絡をとり日程を決め、開催した。現地までの交通の安全性を考慮しバスによる移動とした。

この観察会では、本学の環境 ESD プログラムを受講する学生の実習を受け入れている。2019 年度の実習生の受け入れは 10 名（国文学科 1 名、地域社会学科 9 名）で、事前準備とムササビ観察会の開催など 45 時間の実習を実施した。開催日は次の通りである。

- ① 2019 年 5 月 25 日（土）参加者 18 名
- ② 2019 年 5 月 31 日（金）参加者 17 名
- ③ 2019 年 11 月 16 日（土）参加者 20 名
- ④ 2019 年 11 月 30 日（土）参加者 25 名
- ⑤ 2019 年 12 月 4 日（水）参加者 18 名

参加者からは次のような感想が寄せられた（抜粋）

- ☐ 学生さんたちの案内や司会が良かったです。ムササビ愛を感じました。ありがとうございました。
- ☐ スタッフの方々がムササビや自然を愛されているのがよく伝わってきた。ワクワクした。また来たいです。
- ☐ 学生さんが地域の素材を活かした活動をしているのが素晴らしい。ありがとうございました。
- ☐ ムササビって本当にいるんだ！と実感できたことがうれしかった。とても貴重な体験でした。
- ☐ スタッフの方々の対応がよくて（みんな親切に説明してくれました）、秋もぜひ参加したいです。
- ☐ 費用負担があっても再度、参加したい。
- ☐ 私たちの安全にかんしてよく気を遣ってくれてとても気持ち良かったです。先生や学生みなさまに感謝！
- ☐ ムササビがきれいに見えたことで来て良かったと思った。もしムササビが見られなかったとしても木がおいしげる神社でねころがってボーッとできる時間がもてただけでもすてきな時間をすごせたなと思えたと思う。秋もまた来てみたいです。ありがとうございました。

(3) 都留文科大学附属小学校など地域の小学校への授業参加

学校林や学校に隣接する森をフィールドとし、地域の自然を観察し親しむことを目的とする理科授業を行った。小学校における授業は次の通りである。

- ①都留文科大学附属小学校：4年生を対象とした理科授業（2019年10月31日、2019年11月21日、2020年2月14日）
- ②上野原市立島田小学校：5年生を対象とした理科授業（2019年11月28日）

（４） 富士急行駅舎を活用した展示活動

富士急行線都留文科大学前駅の駅舎を博物館の分館と位置づけ、展示活動を行っている。地域交流研究センターおよび自然共生研究部門の活動を広報し、交流の輪を広げることが目的である。駅舎では、キャンパス周辺の自然、建物などをテーマとした展示を行なった。この展示の様子は、『フィールド・ノート』でも取り上げた。

本学の華道サークルも生け花を定期的に展示しており、駅舎の利用者にも好評であった。

3. 令和2年度の活動予定

今年度は、当初予定していた活動をほぼ予定通り実施することができた。「自然共生研究部門」と改称し、令和2年度は3名の教員でこの部門を担っていく。それぞれの教員の持ち味を活かしながら事業を展開し、領域を超えた協働による事業も今後は工夫したい。

令和2年度、北垣が担当する取り組みとしては次のような事業を計画している。

1. 機関誌『フィールド・ノート』の編集・発行
2. 環境ESDプログラムと連携した「ムササビ観察バスツアー」
3. 地域の小学校の授業への参加
4. 富士急行線駅舎を活用した展示活動

上記の1～4の事業を通して、たんに地域の自然や文化を保存するだけでなく、立場を異にするさまざまな人々が集い、相互の交流・啓発を深めるなかで地域の文化や自然を創造的に継承し新たな文化と社会のあり方を探る場としていきたい。

（文責：北垣憲仁）

Ⅱ－1－2. 水文環境研究と自然に関わる市民公開講座（内山）

1. 平成31・令和元年度の活動概要

「暮らしと仕事部門」として実施してきた事業を、組織改編により今年度から「自然共生研究部門」の事業として実施することになった。本事業は都留市の人々や動植物の暮らしに関わりの深い水文環境について、研究や情報交流することを目的としている。研究対象エリアは東桂地区を中心にして、現地データの収集・解析を行っているが、昨年度より新たに都留市との共同研究で都留市内における地下水モニタリングを開始した。公開講座は新たに野外における講座を実施した。以下にその詳細を述べる。

2. 活動の状況

（１） 都留市十日市場・夏狩地域の湧水調査研究

調査地域には、古富士火山が山体崩壊して桂川の河谷に流れ込んだ古富士泥流堆積物の上に、新富士火山初期の活動期に噴出した猿橋溶岩と桂溶岩の2層が分布している。都留市が

利用する富士山からの湧水は、後者の桂溶岩中を流動した地下水がその末端崖より湧出している。この湧水に関して、十日市場の永寿院の敷地を借用して、2015年度から継続して湧水量と水温の観測を実施している。湧水量の観測は、湧水が集まった小水路に自記水位計 S&DLmini (OYO 株式会社製) を設置して 1 回／時間の連続水位を観測し、流量観測結果を解析して得られた H－Q カーブ（水位と流量との関係式）を用いて水位を流量に換算して湧水量とした。2019 年 1 月から 12 月までの観測結果は次のようである。

湧水量は 475～719 m^3 /day の間で変化した。2019 年 10 月 12 日は 1,045 m^3 /day を記録したが、これは台風 19 号が襲来した日であり、湧水量が増加したのではなく台風の猛烈な雨が周辺から観測地点に流れ込んだ結果と考えられる。その理由として、観測流量が大きな値を示したのは 10 月 12 日のみであり、その後は速やかにそれ以前の湧水流量に戻っている。2019 年の湧水量は、平均的に 670～700 m^3 /day 程度で安定していたが、4 月半ば～5 月上旬と 12 月 10 日以降には 740 m^3 /day 程度に湧水量が減少する時期が続いた。水温については、最高および最低水温のピークがおおよそ 3 ヶ月程度気温の変化よりずれるのはこれまでの測定結果と整合的であるが、2019 年は全体的に高い水温で変化した。水温の低い時期について、2018 年は 5 月半ば～6 月半ばで 12.1℃であったのに対して、2019 年は 3 月の始めから 5 月いっぱい 12.4～12.6℃であった。また、水温の高い時期について、2018 年は 11 月の始め～12 月の始めで 13.6～13.7℃であったのに対して、2019 年は 11 月半ば～12 月半ばで 13.8～14.1℃であった。2019 年は 2015 年に観測を開始して以来最も高い水温を記録した。一般的に地下水温はその地域の年平均気温を反映しているため、地下水温の変化に今後も注視する必要がある。

（２） 都留市内の地下水位モニタリング

都留市では市民の水道水源でもある地下水を保全する目的で、2018 年 10 月に地下水保全条例を制定した。地下水位の経年変化を把握し、地下水賦存量解析などの基礎資料を得るために、桂町（異なる深度 2 本）、十日市場、法能、禾生、鹿留、大幡、朝日馬場の市内 7 地点に 8 本の地下水位観測井を設け、2019 年 4 月よりモニタリングをしており、本学ではその結果の監修をしている。また、それとは別に 2 本の地下水位観測孔が十日市場にあり、都留市との共同研究として地下水位観測を実施している。これらの結果は都留市地域環境課によりホームページ ([https:// www.city. tsuru.yamanashi.jp/soshiki/chiikikankyou/kankyouseisaku_t/9990.html](https://www.city.tsuru.yamanashi.jp/soshiki/chiikikankyou/kankyouseisaku_t/9990.html)) で公表されているので参照されたい。この結果より、都留市の地下水位変動の特徴として現時点では 2 パターンに区別できる。1 つは桂町、十日市場の桂溶岩中の地下水で、10 月の台風の時期のみ地下水位が大きく上昇しているが他の時期は水位が安定している。もう 1 つはそれ以外の地下水で、降雨強度の強い雨が降ると地下水位が跳ね上がり、その後の低減が緩やかで雨の影響が長く続く変動特性を持つ。観測地点の中では、法能地区の観測井は近傍の井戸での揚水の影響を受けているが、現況では地下水位低下に繋がるような影響は受けていないことが判明した。今後も継続したモニタリングが地下水保全のためには重要であるといえる。



都留市地下水位
観測結果

(3) 市民公開講座

令和元年度の市民公開講座は、今年度からの初めての企画として、大学周辺で見学できる湧水を大学教員の解説を聞きながら見て回る「湧水さんぽ」と、本学自然科学棟屋上に設置された天文台を用いて惑星を観察する「星空観察会」という、体験型講座を2つ企画した。しかし天候に恵まれず、「星空観察会」を予定していた2019年10月19日(土)は山梨県にも甚大な被害を及ぼした台風19号の後であり、さらに当日も低気圧や前線の影響で激しい雨が降ったことから、残念ながら中止とした。以下に湧水さんぽについて、詳細を報告する。

○ 湧水さんぽ mini 講座

例年、大学における研究成果を都留市民へ還元する目的で、講演会形式の公開講座を実施してきた。しかし、実際に見て歩きたいという要望があったことから、2019年度は現地に足を運ぶこととした。湧水さんぽは定員10人として2019年6月8日(土)に予定していたが、前日に前線を伴った低気圧の影響で激しい雨となり、当日も雨の予報であった。現地は急傾斜で足場の悪い箇所があり危険を伴うため、現地観察会は中止とし、急遽 mini 講座を実施した。参加申し込み者には事前に現地観察の中止を電話連絡したが、熱心な9名の方が mini 講座に参加してくださった。mini 講座は内山美恵子(都留文科大学教養学部学校教育学科教授)が講師を務め、スライドを使用して富士山の活動や溶岩の分布と都留市での湧水メカニズムについての講演と、溶岩の実物展示、模型を使用した十日市場・夏狩湧水群の湧水実験を紹介した。以下に参加者の感想を紹介する。



湧水実験の様子(地域交流研究センターブログより)

アンケート結果

- ◆地元の人間が、知らないことが多かった。(公務員)
- ◆地元の湧水がどのような形で出ているか、非常にわかりやすかった。又、湧水に限らず、地質を知る事ができた事は有益。(会社員)
- ◆湧水さんぽを楽しみにしていたので残念だったが、近辺の地層や地下の様子、湧水のしくみなどの MINI 講座がとてもわかり易く、おもしろかった。次回さんぽ計画があればぜひ参加させていただきたい。(会社員)
- ◆富士山研究所で、溶岩の見学をした事を思い出したり、卒論で「桂川の水質調査」を(木村圭子先生)した事などを思い出しながら、都留市の水のおいしさを確認でき、良かったです。改めて、美味しい水を飲み続けられるよう、心掛けていきたいと思います。(主婦)
- ◆実際の湧水を見ることができず残念でした。長い年月をかけて湧いてくる湧水のロマン、神秘に感動しました。きれいな水がいつまでも続きますように・・・。
- ◆見学ができなかったのが残念でした。
- ◆本市は湧水にめぐまれた所であるが、何処そうなるのかを知りたいため。

○ 湧水さんぽ

改めて、10月6日（日）に市民公開講座「湧水さんぽ」を開催した。6月の申し込み者を優先したが日程の都合の合わない方もおり、参加者は6名であった。今回は天候に恵まれ、暑過ぎずお散歩向きの天候で、気持ちよくのんびりと湧水を見て回った。コースは、電車で都留文科大学前から電車で東桂まで移動し、太郎次郎滝→長慶寺→永寿院→田原の滝→大学着である。各地点では、地層を見ながら都留の大地の



長慶寺の湧水（地域交流研究センターブログより）

生い立ち、富士山の火山活動について、都留市で湧水が湧く理由、湧水の簡易水質測定、湧水の味見、湧水と都留市民の暮らし、など、内山の説明を聞いたり体験をしながら秋の半日を満喫していただいた。本講座を実施して、都留市にいと当たり前のように湧いている湧水について関心を持っていただき、理解していただくための有意義な講座になった手ごたえを感じた。今後も改良を加えながら、続けていく予定である。参加者の感想を紹介する。

アンケート結果

- ◆とっても有意義だった。地層の解説がとても分かり易く勉強になった。湧水の美味しさに驚いた。別の機会に他の景勝地も歩いてみたいし、友人達に教えてあげたい。（本学1年生）
- ◆湧水の事が色々と解りました。実際に歩いて肉眼で観察できるので、よくわかります。今後も都留市の自然について色々講義を開いて頂きたいです。（会社員）
- ◆富士山の噴火の過程が都留市の湧水と関わっていることを初めて知りました。個人的に行ってみたい場所ばかりでしたが、先生の説明を聴けたので湧水まわりの美しさのみでなく興味深くなりました。
- ◆初めて太郎・次郎滝を見て、湧水の神秘性を知れて良かった。これからも都留市をよく知るため散歩・ウォーキングしていきたい。久しぶりに富士急線に乗れなつかしかった。天候に恵まれ（暑くも寒くもなく）、季節の花を楽しむことができました。これからはイベントに参加してみたい。
- ◆昔、白糸の滝で見た湧水よりも勢い良くあふれ出る湧水を見、とても感激しました。先生からとてもわかり易い説明を受け、歩きながら楽しむ事ができました。ありがとうございます。
- ◆都留市の湧水について以前から知りたかったので、参加しました。
- ◆内山先生のお話で富士山のなりたちからというところを知って、改めて富士の恵みの恩恵の深さを知りました。ありがとうございました。

3. 令和2年度の活動予定

(1) 都留市を流れる水文環境に関する研究の実施

湧水の連続観測地点を十日市場エリアから夏狩エリアにも広げ、より詳細な湧水特性を把握する。

(2) 市民公開講座

令和2年度は昨年度に引き続き、十日市場・夏狩湧水群の野外見学、自然科学棟天文台を利用しての星空観察、研究成果の講演の3回の市民公開講座を実施する予定である。

(3) 都留市の水環境理解促進のための展示準備

十日市場・夏狩湧水群など都留市の特徴的な水環境を理解するための博物館スペースでの展示についての準備への取り組みを始めたいと考えている。

(文責：内山美恵子)

Ⅱ－1－3. 農林業の現状を明らかにする農林地一筆マップの作成、 2号館横ビオトープ（仮）の観察（福島）

1. 平成31・令和元年度の活動の振り返りと令和2年度の活動に向けて

近年、全国各地で農山村に暮らす農家林家の高齢化が進行している。2015年の世界農林業センサスによると、都留市の販売農家のうち主として自営農業に従事した人の76%が65歳以上となっており、農林家の高齢化の進行が都留市においても懸念される。農林家の高齢化が進むと、地元産の農産物を身近に手に入れることができなくなったり、荒廃農地が増加し鳥獣害被害が深刻化するなど様々な問題が生じる可能性があるが、現在の都留市の農村風景を外から眺めるだけでは、これらのことを想像することは困難といえる。

そこで2020年度以降の始動を目指して、2019年度は「都留市の農林業の高齢化の現状を明らかにする農林地一筆マップの作成」事業を構想し、予算確保や農業に詳しい方へのヒアリングなど準備を進めた。まずは実際に歩くことが容易な水田や畑の耕作者の状況について情報を聞き、地図に整理していく予定である。

また、身近な自然環境を観察する場として、2016年秋に本学図書館横ビオトープからグラウンド2号館側に移された樹木の生育観測を開始する。2020年度より、移植された樹木の成長を記録し、樹木が新しい環境に適応する過程を観察するとともに、ビオトープに新規参入する植物についても継続的に観察する予定である。

2. 活動の状況

(1) 都留市宝地区の農業の状況について聞き取り調査

2019年9月11日に都留市農業委員の安田圭一氏に宝地区の農林業の状況について聞き取り調査を行った。宝地区の上大幡自治会は5つの組にわかれるが、そのうちある組の状況について詳しくお聞きした。その組では、16世帯のうち水田耕作を行っているのは3世帯のみであり、耕作者も全員70代以上という状況が明らかになった。



2019年9月11日 都留市上大幡地区の水田の様子
撮影：福島万紀

(2) グラウンド2号館側ビオトープ（仮名）の樹木のマッピング調査

2016年秋に本学図書館横ビオトープからグラウンド2号館側に移植された樹木は少なくとも9科13種であった。ツノハシバミ（ヘーゼルナッツの仲間）、オニグルミなどリスなどの小動物が好む樹木や、ケヤマハンノキなど湿地を好む樹木も移植されている。2019年度は、これらの樹木の大まかな位置をマッピングし、あらためて種類を確認した。



2019年9月12日 グラウンド2号館側ビオトープ（仮名）のケヤマハンノキ 撮影：福島万紀

（文責：福島万紀）



Ⅱ－２．共生教育研究部門

Ⅱ－２－１．地域情報教育

１．活動指針

2007 年度（平成 19 年度）から地域交流研究センターにおける活動の柱の一つである「発達援助部門」の中の分野の一つとして取り組んでいる。

「地域情報教育」における活動の指針として当初提示されたものからは、取り巻く情報に関わる環境の変化とともに修正をしつつ、現在は、次の（１）・（２）を掲げているものの、（１）については、ここ数年はほとんど活動していないため、整理しつつ新しい可能性も探りながら現場の先生方とも相談しつつ何かしらの活動を行うことを目標としている。（２）については、2011 年度から初等教育学科（現・学校教育学科）図工・美術教室の鳥原先生が中心となって活動している、地域への美術教育支援プログラムの中で、都留市内では旭小学校をフィールドとした、図工・美術と情報の連携した新しい図工・美術教育システム作りプロジェクト（たからばこ作戦）を活動の一つとして加えたことにより、平成 27～29 年度には科学研究費挑戦的萌芽研究にも採択され、引き続き注目度の高い活動をしている。また、今年度より「DIGITAL ずこうしつ」における活動に関しては新しく項目を設定することにした。

（１）小中学校への情報教育全般に関する支援

- ・小中学校情報教育への支援
- ・大学と小中学校間における情報交換

（２）図工・美術と情報の連携した教育システム作りプロジェクト（たからばこ作戦）

- ・こどもアトリエ（兵庫県西宮市）を協力組織とする。
- ・保護者への説明、作品の撮影及び利用に関する許諾を得る
- ・交流支援

（３）「DIGITAL ずこうしつ」の運用

今年度は、これまでの活動の評価・点検に重点をおき、改善点の洗い出しやこれからの活動方針の作成に向けてプロジェクト関係者の意見の集約を中心に行った。そんな状況の中で、「DIGITAL ずこうしつ」における、信州大学、ものづくり大学との新しい交流プロジェクトを発足させた意義は大きい。また、これまでの様々な実践活動の中で立ち上げた「たからばこ作戦」の『こどもアトリエ』との連携交流プログラムは主宰者を取り巻く環境の変化により次年度以降の運営が困難となっている。

２．令和元年度の活動

これまでの基盤づくりにおいて培ってきた成果を基に、より実践的な研究活動として実施してきた。その具体的成果は以下の通りであるが、特に、「STEAM 教育」の実践を目指し新たに立ち上げた他大学（信州大学、ものづくり大学）との連携プロジェクトチームについては、２回の研修会の開催を経て、新年度における地域連携（都留市内小学生対象）ワークショップ開催を目指すことは大きな成果である。

(1) 中学校の科目「技術科」の授業担当

都留第二中学校3年生の科目「技術科」の担当教員が配置されなかったため、鬘櫛校長先生からの依頼により、山梨県教育委員会の「中学校助教諭臨時免許状（技術）」の非常勤教員として担当（情報分野のみ）4クラス112名 平成31年4月16日（火）～令和2年2月25日（火）30週間（火曜午前中）

(2) データベースシステム「たからばこ」の維持管理

自分たちの活動への理解を深めるために開設したミラーサイトの日常的活用法を検討した。（<https://takarabako.tsuru.ac.jp/demo>）



(3) 次世代の学び合いの場づくりを目指して：『DIGITAL ずこうしつ』

受講生だけでなくICTを活用したものづくりに興味のある学生や教員が集いやすく、学生たちが自由に発想を練り、演習・発表等を行える場作りを目指し、図工・美術関係の授業において活用された。また、都留市役所産業課や都留市経営者連絡協議会からのレーザーカッター・3Dプリンター活用状況や製品閲覧、更に教室環境の視察を受け入れた。

(4) 新たな他大学との連携プロジェクトチームの結成

信州大学工学部の香山瑞恵教授、ものづくり大学技能工芸学部の永井孝准教授との連携プロジェクトチームを立ち上げた。

学内メンバー：鳥原正敏、青木宏希、山本直紀、吉岡治、杉本光司、大輪知穂

- ・プロジェクトに関する打ちあわせ：2019/10/26（金）香山教授、永井准教授来学

- ・第1回研修会の開催：2019/12/18（水）午前10時～午後1時

micro:bit（マイコン）とLEDランブイルミネーション教材との連携プログラミング

参加者 香山、永井、青木、山本、杉本、大輪

- ・第2回研修会の開催：2020/3/26（木）午前10時～午後1時

来年度開催予定のワークショップでのテーマ探求及び前回研修会の復習と確認

参加者：香山、永井、鳥原、新井、青木、山本、吉岡、杉本、大輪

(5) ワークショップ開催

地域交流研究センターの市民公開講座として開催した。

日 時：令和2年1月25日（土）午後1時～3時

テーマ：心に残る大切なことばを刻もうー小さなストラップづくりー

講座の内容：小枝や木切れに好きなことばやキャラクターをレーザーカッターで刻印し、
小さなストラップを作る。

対象学年：小学4・5・6年生

参加人数：9名

会 場：DIGITAL ずこうしつ（美術棟2階205教室）

指導者：青木、杉本

指導補助学生：3名（学校教育学科2年）

NHK山梨の取材を受け、同日、夕方のローカルニュースとして放送された。

(6) 令和元年5月26日（日） 西宮市 ギャラリー小さな芽

「こどもアトリエ」の年1回の展覧会である「さつき展2019」への参加と作品の撮影、今後の活動内容についての打ち合わせ。

(7) 令和元年6月28日（金）ものづくり大学視察研修 午後1時～午後4時

埼玉県行田市の「ものづくり大学」（ものづくり大学：学長他6名、本学：福田、鳥原、杉本、大輪）

「ものづくり大学」における美術とICTとの連携による新しい実践の現場を視察し、主として「DIGITAL ずこうしつ」の運営への参考とした。

3. 令和2年度における活動予定

- ①市民公開講座の開催（子ども公開講座：プログラミング）
- ②3大学（信州、ものづくり、都留）連携のワークショップ開催（本学において）
- ③図画工作以外の科目に対しての支援の可能性を調査する。
- ④プロジェクト「たからばこ」の継続に関して『こどもアトリエ』との打ち合わせ
- ⑤その他

（文責：杉本光司）

Ⅱ－2－2. 地域美術教育

【活動の振り返りと今後の活動に向けて】

今年度も多くの地域の方と活動することが出来、貴重な経験をさせて頂くことが出来ました。この場をお借りして感謝申し上げます。

私たちの活動の目的は、地域との繋がりを意識し、大学として地域教育のもつ可能性を活かし、深めていくことです。

私たちは、「私たちの考える図工」と「人の交流」を手がかりに、「地域の中の大学の役割」を考え、より良い学びの機会について、多くの学生とともに探っています。また、活動の中で観ることの出来る子どもたちの思いもよらぬ発想や素直で活動的な姿勢は、私たち大学教

員の研究を深めています。そしてまた、学生にとっては、現場の教育活動を実感できる貴重な経験となっています。

私の研究する図工美術は「かたち」や「色」を扱う分野です。子どもは、身の回りの出来事や目に映るモノに常に心を動かしています。

私たちの関わる活動では、子どもたち自身が創造的に「かたち」や「色」を作り出し、自身が作り出したその「かたち」や「色」から楽しさや美しさといった感動を得られるように計画し考えています。また、活動をする中で、周囲の人と自分の考え方や感じ方などの違いに気づき、互いの価値観を認め合いながら成長していくことが出来ることも伝えたいと考えています。言葉だけでは感じ取りにくい「もの」や「場」を通して養える「生きる学び」であると考えます。

私たち教員も学生とともに、活動の意義を考え、今後の活動へと繋げて行こうと考えています。

【年度内の活動の状況】

○クロボ アート活動

5月18日 「シャボン玉アートにチャレンジ！」

6月15日 「色々な素材を使って『世界』を表現しよう！」

12月7日 「ペットボトルに表現しよう！」

○都留市立旭小学校 大学教員出張授業 陶芸体験

11月29日 「板づくりのマグカップ」

○都留市保小連携事業 宝保育所造形教室

6月28日 「シャボン玉アートをたのしもう！」

7月19日 「ドロドロ粘土とたからものでつくる顔」

12月20日 「ねんどでやきものの体験」

○都留市立谷村第二小学校 土曜体験学習 陶芸講座

10月26日 「板づくりマグカップ制作」

○都留市教育委員会主催 子ども公開講座

7月27日 「木を使った工作」

7月28日 「板づくりやきものの体験」

○DIGITALずこうしつ公開講座 ワークショップ

1月25日 「心にのこる大切なことばを刻もう」

(文責：青木宏希)



『板づくりやきものの体験』活動風景



『世界』を表現しよう
造形活動の様子

Ⅱ－２－３．地域インクルーシブ教育

１．地域インクルーシブ教育分野の目的

地域インクルーシブ教育分野は、特別なニーズのある子どもたち（および保護者）への教育・心理的支援とインクルーシブな地域づくりを推進することを目的としている。この分野の主要な活動は以下である。

- ① 特別なニーズのある子どもたちを対象にした地域の居場所づくりの活動“クロボ”
- ② 特別なニーズのある若者を対象にした“キャリアデザインワーク”（※“キャリアデザインワーク”は、クロボのグループ別活動の１つとして展開）
- ③ 一般市民や現職教員・指導員を対象にした障がい理解やインクルーシブな地域づくりに関する研修

２．活動の内容

2019年度については、①～③について計画どおり展開できた。以下では、個々の活動の内容について簡単に示すことにしたい。

① 特別なニーズのある子どもたちを対象にした地域の居場所づくりの活動“クロボ”

これは、「クロスボーダー・プロジェクト」という活動である。「健常者と障害者の境界（ボーダー）を超える」という意味で名称を「クロスボーダー」とし、かつそのプロセスとして地域の方々と「コラボ（連携）」してやっていきたいという意味で通称を“クロボ”としている。2019年度は、大学の学期中（４月～７月、１０月～１月）月１回土曜日に１０時～１５時で実施した。日程としては、５月１８日、６月１５日、７月１３日、１０月１９日、１１月９日、１１月１０日、１２月７日の計７回開催した。地域から参加するメンバーは主に知的障害・発達障害のある小学生から社会人まで年齢も多様で、基本的に１年間固定である。2019年度は小学生～高校生までの子どもメンバーが２４名、OB・OG等の社会人メンバーが７名参加してくれた。その他、午前中のホッケー活動のみ、NPO法人 おもちゃ図書館はばたきの利用者さん数名、社会福祉法人あすなろ会 みとおしの利用者さん数名がゲスト参加してくれた。

毎回、平均５０名ほどの学生や市民がボランティアとして参加し、のべ人数では、１２０名を超えるボランティアが関わってくれた。学校教育学科（初等教育学科）特別支援学校教職課程の「特別支援フィールドワークⅠＡ」「特別支援フィールドワークⅠＢ」を受講する学生も、学生ボランティアとして参加した。

<前期>

- ① 5月18日(土) 午前：ホッケー 午後：アート、キャリア
- ② 6月15日(土) 午前：ホッケー、フリスビー 午後：アート、キャリア
- ③ 7月13日(土) 午前：ホッケー、フリスビー 午後：音楽、キャリア

<後期>

- ① 10月19日(土) 午前：ホッケー 午後：音楽、キャリア、
- ② 11月9日(土) 午前：ホッケー、キャリア 午後：環境学習、キャリア
- ③ 11月10日(日) 午前：キャリア 午後：キャリア
- ④ 12月7日(土) 午前：ホッケー、フリスビー 午後：音楽、アート

クロボは、午前が全体活動、午後がグループ別活動としている。各回の活動の様子については、写真とともに、地域交流研究センターブログに掲載した。

2019年度の新たな試みとして、6月の午前の回と11月の午前の回を、都留市で活動している「いこいのひろば」という地域の障がい者交流サークル（成人の障害者が多数参加）と合同で開催したことである。普段から、クロボと「いこいのひろば」の両方に参加し、ホッケーに親しんでいる参加者・ボランティアもいて、大変盛り上がった。また、11月の午前の回では、認定NPO法人 スペシャルオリンピックス日本・山梨とも合同で行い、参加者でチーム分けしてフロアホッケーの競技会（ユニファイドスポーツ大会）を開催した。これも大変盛り上がった。

②特別なニーズのある若者を対象にした“キャリアデザインワーク”

☐概要

本事業は2015年度からクロボのグループ活動の一つとして開催されてきた。2017年度からは特別支援学校教職課程が開設されたことに伴い、当該課程のフィールド科目「特別支援フィールドワークⅡ」（集中講義）として位置付けられ、原まゆみが担当した。2019年度は特別なニーズのある中高生の将来イメージ形成に寄与するキャリアプログラムとして年間6回実施した。実践のまとめ冊子を作成し成果を確認するとともに、山梨大学附属特別支援学校公開研究会でポスター発表を行った。

☐参加者

中高生・若者の当事者13名、大学生12名であった。

☐運営委員（地域の専門家）11名

NPO法人 おもちゃ図書館はばたき理事長、障がい者就業・生活支援センターありす就業支援ワーカー、フリースクールオンリーワン理事長、山梨県立ひばりが丘高等学校教諭、山梨県立やまびこ支援学校教諭、元通級指導担当教諭、笛吹市立一宮西小学校教諭、県立高等支援学校桃花台学園教諭、保護者・放課後等デイサービス事業者、親の会「ぶどうの会」代表者・保護者

☐職場提供者

職場体験にご協力下さる事業所等は10カ所以上、2019年度は次の3カ所で体験させてい

ただいた。暖かい理解のもとで貴重な体験ができたことを感謝している。

曾雌ニンク生産協同組合様、不二家東桂店様、なかのや食堂様

□ワーク実施内容

目標 ○自分はどんな大人になりたいか、仲間と一緒に考えてみよう。

○どんな仕事に向いているか、職場体験をしてみよう。

○将来の夢や希望をつかみ、今できることに取り組もう。

内容（場所：3号館204号室）

No	日程	内容
1	5月18日（土）13時10分～15時	○自己紹介 ○キャリアデザインワークの説明
2	6月15日（土）13時10分～15時	○仲間づくり 「自分と仲間のいいところゲーム」
3	7月13日（土）13時10分～15時 保護者の語り場①10時30分～12時	○職業イメージを育てよう 「キャリア人生ゲーム」
なつやすみ		
4	10月19日（土）13時10分～15時 保護者の語り場②10時30分～12時	○職場体験の準備をしよう ○カードゲームで体験をイメージしよう
5	11月9日（土）10時～15時	○職場体験：それぞれの職場で仕事を体験しよう
6	11月10日（日）10時～15時	○職場体験で学んだことを振り返ろう ○まとめ交流会「キャリア人生ゲームⅡ」

□成果と課題

当該ワークに関与しているのは、当事者、学生、保護者、運営委員、地域の職場提供者である。今年度の当事者は13名で、高校を卒業した若者が増え4名となった。高校を卒業した当事者は県外の専門学校に進学したケースもある。また中学1年生が2名参加し年齢幅が広がった。先輩の存在は新しく参加した中学生たちへのモデルともなり異年齢集団の意義が生まれている。在籍校では不登校が続いている中学生がワークへの参加を契機に将来イメージを掴み高校進学を希望するようになったり、食堂での職場体験を通して職業イメージをもち、食品関係の職業につくための進路を選択したりしたケースもある。当事者にとって有意義な体験になっていると思われる。

学生はフィールドから直接学ぶ貴重な機会として企画運営に主体的に取り組み、テーマを「ちゃれんじ」と設定し、子ども理解、支援方法、協力心などに大きな成長がみられた。緩やかな学びの場として楽しい内容を考案し、当事者の意欲を引き出した。毎回まとめを行い大学IPのブログに情報発信し年度末には実践報告集も作成している。

運営委員はそれぞれの持ち場で起きている課題を意見交換する貴重な機会となっているが、仕事の都合で出席できない委員もいるので、対応が必要である。保護者は昨年から新たに「保護者の語り場」を設定し交流を深めた。ざっくばらんな交流会の中で情報交換が深まり、貴重な機会となっている。職場提供者は、なかのや食堂様が新たに体験を受け入れてくれた。体験から進路選択につながったケースもあり貴重な体験となった。

今年度はワーク参加者へのアンケート調査を実施し成果と課題を整理した。結果から、学

生が企画運営を行い当事者と寄り添いながら支援することの意義が明らかになった。今後は学生の学びを検証すること、保護者の交流機会を充実させること、こうしたプログラムに関心のある方に情報発信すること、大学としての運営基盤を整え安定的に継続発展させることなどに取組み改善充実していきたい。

③一般市民や現職教員・指導員を対象にした障がい理解やインクルーシブな地域づくりに関する研修・ワークショップ

2019年度は、以下に示す研修・ワークショップを実施した。

・現職教員を対象にした「通常学級における特別支援教育」に関する研修会

7月24日(水)13時～15時に山梨県総合教育センター中堅教員研修会を兼ねて実施した。堤が講師を担当した。約60名の参加があった。

・障がい当事者を講師としたワークショップ

11月9日13時30分～15時に、「YAN山梨芸術活動支援ネットワークセンター」との共催の形で実施した。約40名の参加者があり、主たる参加者は、都留市の障がい者交流サークル「いこいのひろば」のメンバー及びボランティアであった。具体的には、2グループで活動し、1つのグループでは、フードフィギュア作家の坂本絵里さんを講師として、「フードフィギュアを作ろう!」というワークを行い、樹脂粘土を使用してオリジナルのキーホルダーを作った。もう1つのグループでは、フェルト作家の笠原瑠美さんを講師として、「フェルトストラップを作ろう!」というワークを行い、フェルトで可愛い動物のストラップを作った。

3. 2020年度の活動の展望

新型コロナウイルスの蔓延に伴い、残念ながら、2020年度の活動の見通しが立たない状況にある。2019年度の成功を踏まえ、2020年度も「いこいのひろば」との合同を計画していたのだが、それも保留の状況にある。2020年5月の段階では、後期4回のクロボ（キャリアデザインワークを含む）の開催を計画している。研修会の開催については未定である。

これまでクロボでは、大集団のグループでダイナミックに関わり合うような活動なども実施してきたが、今後は、クラスターを避けるため、グループ分け、分散での活動などを念頭に、活動内容を再検討していくことが求められてくるだろう。

クロボは、2020年度で発足から7年目に入る。年数を重ねてきたことで、いまや、「クロボ」を拠り所にしてきている参加者、保護者、ボランティアが少なからずいる。運営側としては、その思いを大切にしつつ、なにかしらの形で継続していけるように、方策を考えていきたい。

(文責：堤英俊、原まゆみ、齋藤淑子)

Ⅱ－２－４．社会教育

１．社会教育分野について

2019年度の組織改編にともなって新設された共生教育研究部門の社会教育分野は、地域における多様なエージェントを巻き込みながら、それらがつくりだす共同学習の支援を旨とし、とりわけ、都留市内に新たな成人教育の場を創出し、そこに高等教育機関としての本学がもつ学問知をつなぎ合わせることを目的とする。

２．2019年度の活動：「つるぶん café」

①活動の趣旨

上記のことを目的として、2019年度は地域交流研究センターのサテライトと共同で「つるぶん café」を企画、運営をおこなった。同サテライトは、まちづくり交流センターに置かれ、より地域住民に近いところにあつて、センターが行う事業を広く広報するとともに、地域のニーズをすくい上げ、掘り起こす機能を果たしてきた。

このようなサテライトと社会教育部門の共同企画「つるぶん café」は、英国における大学拡張運動が、出張講座における労働者階級への大学教員のチュートリアルに始まったように、さらに、英国におけるカルチュラル・スタディーズが、成人教育の場におけるチュータと学習者の知の交流を起点とするように、本企画は、大学による地域貢献であるとともに、新たな学問知が生まれる場の創造を目指す。さらに、参加者間の相互作用と、単発になりがちな出前講座としてではなく、内容に依存しない学びの継続性に重点をおいて運営をおこなう。

②第1回「つるぶん café」の概要

- ・日 時：2019年11月9日（土）13時30分～15時
- ・場 所：BAKERY CAFE いちごいちえ（都留市上谷2丁目5－7）
- ・参加費：無料（参加者にはワンドリンクの注文をお願いする）
- ・テーマ：「令和」から見る万葉集
- ・チュータ：鈴木武晴先生（国文学科教授）
- ・定 員：15名

③参加者の声（抜粋）

当日は11名の参加があつた。前半のチュータのお話を受けて、後半は参加者から感想、意見、質問を共有する展開とした。今後参考にすべき運営上の課題（机の配置、学習環境づくりなど）を含め、以下のような感想を得た。

- ・万葉集にゆっくりふれることができてとても良かったです。鈴木先生のお話しのされ方がとてもじっくり自分の中に言葉とともに入ってきたので、また、ほんとうに機会を作っていただき、是非、継続していただけたらうれしいです。また、他のテーマであっても、あまり気負わず参加できるカフェであれば、おじゃましたいと思いました。ありがとうございました。
- ・話し方が良く、よく理解できた。固い雰囲気ではなく良いと思います。
- ・「万葉集」について初めて学ぶ機会を得られ、とても楽しかったです。難解な文章という

印象がありましたが、鈴木先生のやわらかな口調とやさしい説明で自分なりに理解する事が出来ました。これからも少しずつ万葉集にふれてみたいと思いました。

- ・とても鈴木先生のお話がわかりやすく又お勉強を続けさせて頂ければと心よりお願い申し上げます。
- ・令和の万葉集ということで参加させていただきましたが、私にはなじみのない短歌ということでむずかしかったです。前の人の短歌をきいて自分の歌を作るというのはすごい頭を使い、昔の人は頭が良かったなあとと思いました。よくを言えば静かなところが良かった。

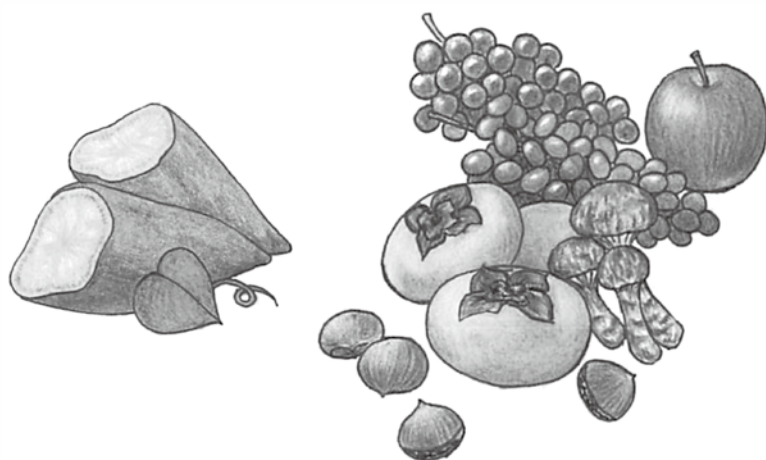
3. 2019年度の総括と2020年度に向けて

先に述べたように「つるぶん café」は、参加者間の相互作用と学びの継続性を重視して運営を行う。初回参加者にも第2回への参加を呼びかけ、うち数人の参加の意向を確認していた。2020年3月に開催を予定していた第2回については、コロナウィルス感染拡大を受けて急遽中止の判断を行ったため、相互作用や学びの継続には至らなかった。しかしながら、上記参加者の声にもあるように、学問知に「あまり気負わず」に触れる機会としての「つるぶん café」は、その未発の可能性をもつことは十分に確認できた。

2020年度はこのことを受けて、「つるぶん café」を周知するためのリーフレット、学びの継続を支える「つるぶん café」通信の発行などを通して、活動の定着を図り、今後は、「○○を“つるぶん café”で取り上げたい」、「うちのカフェで“つるぶん café”を開催したい」との声が地域住民から持ち込まれるような、つまりは、地域に愛され、学習者自らが学習内容を編成するような活動を展開したい。

また、既存の学外向け講座との共同開催を含み、地域交流研究センターの事業を横断するような開催を考えたい。

(文責：富永貴公)



Ⅱ－３．まちづくり研究部門

駅舎を中心にした、まちづくりプロジェクト

プロジェクトの目的

まちづくり研究部門では、持続可能なまちづくりを学生とともにデザインし、地域住民や自治体、地元企業等と連携しながら実践活動に移し、実社会での学びの機会を創出することを目的としている。

このプロジェクトでは、学生自らが地域社会の課題を捉え、その解決策を考え実践活動につなげ、これからのまちや地域社会のあり方を考察する機会を創出するとともに、地域に対する関心を高めることを目的とする。谷村町駅舎を拠点に地域と大学生との交流・学び・まちづくりの拠点を創出し、中心市街地の賑わいづくりに寄与するとともに、これからの地方公共交通を支えるしくみづくりを試みる。

事業名称・事業主体

全体事業名

産官学民連携による「谷村町駅舎を活用した地域づくりプロジェクト」

事業主体（下記５者による協働連携）：

- ・早馬町自治会
- ・富士急行株式会社
- ・都留文科大学教養学部地域社会学科鈴木健大オープンゼミ
- ・都留市
- ・生涯活躍のまち・つる推進協会

実施内容

富士急行線「谷村町駅」駅舎を拠点にした地域連携のまちづくり

- (1) 駅舎の地域利活用「ぷらっとはうす」（旧駅員住み込みのスペース 6 畳 2 間）
 - ・放課後の子どもたちの居場所づくり（2019 年度計 50 回）
 - ・貧困家庭における子どもの学習支援
 - ・エアコン設置のため、クラウドファンディングを実施（5 月 8 日～6 月 16 日）
※ 6 月 5 日（水）目標額の 200,000 円達成
- (2) 「ぷらっとはうす」を基軸にした、地域コミュニティづくり
 - ・餅つき大会、桜まつり参加、流しそうめん大会、田植え・稲刈りの参加等

実施方法

地域社会学科鈴木（健）担当による、全学部全学科の学生を対象にした、オープンゼミとして実施

参加学生

2 年生 16 名（地域社会学科）

1 年生 9 名（地域社会学科、学校教育学科、比較文化学科、英文学科）

実施時期及び実施回数

実施時期：通年

- ・「ぶらっとはうす」開催日：概ね週1,2回（15時30分～18時）
- ・定例ミーティングを“朝活”と称して、毎週火曜日8時～9時実施

対 象：小学生～高校生

実施状況：毎回10名前後の子どもたちの参加、10月23日時点で通算50回実施
地域との餅つき大会、さくらまつり、田植え、流しそうめん等も実施

これまでの経過と2019年度の実施状況（定期の「ぶらっとはうす」以外）

2018年度

7月：都留市と具体的な計画の相談開始

- 11月：早馬町内会・富士急行株式会社・都留市・都留文科大学合同話し合い
富士急行株式会社による駅舎内改装工事
必要備品収集
スペース内整備（掃除）・必要品持ち込み
広報及び駅舎利用調査

- 12月：駅舎及び駅周辺美化活動12月2日（日）
「ぶらっとはうす」オープン12月6日（木）

- 1月：もちつき大会（1月12日（土））

2019年度 ※コロナウイルス感染予防のため、2020年2月中旬より活動休止

- 4月：早馬町内会さくらまつり4月14日（日）

「つるでつながる、まちあるき」4月21日（日）

- 5月：クラウドファンディング「FAAVO やまなし」開始 5月8日（水）～6月16日（日）
「つる子どもまつり」5月19日（日）

- 6月：田植え6月1日（土）

- 7月：流しそうめん大会7月10日（水）

- 8月：夏休み宿題スペシャル8月6日（火）～8日（木）

- 9月：稲刈り10月5日（土）

- 11月：遠足11月3日（日）

国際教育学科留学生との交流会11月27日（水）

- 12月：クリスマス会12月18日（水）

- 2月：貧困家庭における中学生を対象にした学習支援開始2月5日（水）



「ぶらっとうす」のようす (2019年6月)



地域住民や子どもたちともちつき大会
(2019年1月)



早馬町さくらまつり (2019年4月)



地域住民や子どもたちと流しそうめん大会
(2019年7月)



楽山公園への秋の遠足 (2019年11月)



国際教育学科との交流会 (2019年11月)

(文責：鈴木健大)

Ⅱ－４．グローバル交流研究部門

令和元年（平成31年）度「あかでみあ・ふじやま」について

「グローバル」な実践を導くひとつの鍵は、普遍性を持つ現象を地域に見出していくことにありと筆者は考えている。そうしたなかで、多様な人々（都留文科大学の学生出身地はすでにかなり多様なのだが）との交流の中で、文大がある富士北麓地域の特性を（再）発見することが、この「あかでみあ・ふじやま」プログラム（Academia Fujiyama Program、以下AFP）のねらいである。

AFPは、都留文科大学の学生と国内の大学にすでに留学している学生との交流を深めながら、足もとの文物に関してともに学ぼうというスタンスを採用している。今年はプログラム計画の段階から有志学生の参加を得てともに計画作りを行なった。またプログラムは英語と日本語の両方の言語を用いて行なった。文大生にとっては富士北麓地域の（再）発見とともに、英語を用いて多様な出身地の他大留学生とともにコミュニケーションを行なうことで大きな刺激があったようである。参加者は、部分的な参加者を含め文大生5名、他大の留学生10名であった。実際に行なったのは次のような内容の教育プログラムであった。

第1日（8月26日）

学生集合

富士吉田・火祭り（フィールドワーク、於・富士吉田市内）

第2日（8月27日）

オリエンテーションおよびフィールドワーク（都留と富士北麓地域の生活、新倉山浅間公園、すすき祭り、於・都留市内、富士吉田市内）

第3日（8月28日）

都留と富士山の湧水に関連したフィールドワーク（於・都留市内）、（学校教育学科・内山教授による）

博物館でのセミナー（笛吹市内）

第4日（8月29日）

フィールドワーク（浅間神社・富士山五合目・河口湖・西湖等）

ムササビ観察（於・都留市内（希望者のみ））

第5日（8月30日）

出発準備

プログラムは好評で、特段の問題なく全日程を終えることができた。学生同士の交流もたいへん活発であった。文大生も都留市内のことについて新鮮な学びがあったようである。また普段の友人関係とは異なる地域から学生を迎えたことで、交流の幅や視点が大きく広がったようである。

また本年度も学校教育学科の内山教授に、都留市内の湧水に関する特別講義を実施していただいた。現地を実見しながら学ぶスタイルは（暑い時期なので大変だが）、地域の事例に普遍的な性格を見出していく「グローバル」な教育実践として出色のものである。また、事務上の世話を行なってくださった事務局の皆さんにも厚くお礼を申し上げたい。

（文責：山口博史）

Ⅲ．インターフェイスとメディアの活動

Ⅲ－１．第15回地域交流研究フォーラム

開催内容 「多様な立場でつながる地域 ―学生ボランティアの視点から―」と題して、地域でボランティア活動を行っているかたや、ボランティアに関心のあるかたに集まっていただき、今後のボランティア活動のあり方を考えるフォーラムを開催した。

日 時：2020年1月22日（水） 18時30分～20時

場 所：都留文科大学5号館203教室

＊なお当日の様子については、当年報の1～19頁に報告を掲載しています。

Ⅲ－２．各種講座の開催

（１）都留文科大学現職教員教育講座

【講座の趣旨】

令和元年7月24日に、都留文科大学夏季集中講座として「現職教員教育講座」を開催した。

この講座は、山梨県総合教育センターが開催している「中堅教諭等資質向上研修（10年経験者研修）」の選択講座として、同センターとの共催で例年実施しているもので、平成30年度より、午前の部に『道徳性の涵養』、午後の部に『教育現場におけるユニバーサル・デザインの利用』の2講座を開講する形で実施している。

令和元年度は、午前の部を前年度に続いて教職支援センターの宮下聡特任教授、午後の部は学校教育学科の堤英俊准教授に担当していただき、県内各地の小中学校及び高等学校・支援学校等の教員から、午前の部51名、午後の部50名が受講した。

【日程と内容】

日 時：令和元年7月24日（水） 10時～15時

場 所：都留文科大学1号館4階403教室

9 時 30 分～10 時	受 講 受 付
10 時～12 時	『道徳性の涵養Ⅰ』 講師：宮下 聡（教職支援センター特任教授） 内容：全校種の教員を対象に、道徳性とは、その涵養の方法等について、また、学習指導要領の目指すもの等について。
12 時～13 時	休 憩（昼 食）
13 時～15 時	『教育現場におけるユニバーサル・デザインの利用Ⅰ』 講師：堤 英俊（学校教育学科准教授） 内容：全校種の教員を対象に、特別な配慮の必要な児童生徒の特徴と、ユニバーサルデザイン等の利用が、普通の児童生徒にもわかりやすい授業となることについて。

（文責：事務局）

（２）都留文科大学子ども公開講座

「子ども公開講座」は、都留市教育委員会の「放課後子ども教室」事業との連携により、本学の市民公開講座の一環として、平成 25 年度から本格的に開始された。対象となるのは、放課後子ども教室に参加している小学生で、夏休み・冬休みの期間や休日に、主として大学内を会場として開催されている。

令和元年度は 6 月から 11 月にかけて 6 つの講座を企画し、すべてを開催することができた。その状況は下記の通りである。

令和元年度子ども公開講座参加人数一覧

※参加者数には、保護者及び引率指導員等を含む

日程	講座タイトル	講師名	実施場所	参加者数
6 月 16 日（日） 15 時～16 時 30 分	「サッカー教室」	サッカー部（部員 3 名） 寺川宏之（顧問）	グラウンド	22 名
7 月 27 日（土） 14 時～15 時 30 分	「作って遊べる工作教室」	竹下勝雄 鳥原正敏 青木宏希 山本直紀	美術棟	19 名
7 月 28 日（日） 10 時～11 時 30 分	「陶芸教室」	竹下勝雄 鳥原正敏 青木宏希 山本直紀	美術棟	18 名
8 月 6 日（火） 14 時 30 分～16 時	「インターネットを使った読書の楽しみ方」	野中 潤	2 号館	10 名
8 月 7 日（水） 9 時 30 分～11 時	「理科実験教室」	山田暢司	自然科学棟	18 名
11 月 16 日（土） 10 時～11 時 30 分	「森の木の実を見つけてみよう！」	北垣憲仁	大学周辺の森	18 名

来年度も都留市教育委員会からの要望に応じて、様々な講座を開催する予定である。

（文責：事務局）

Ⅲ－３．学部共通科目の開講

（１）「地域交流研究Ⅰ」—より広い視点から地域をみる—

地域を把握する際に、現場を地道に歩いて知見を蓄積していくスタイルがある。筆者自身これを実践しているし、地域でみられる事例に関する説明を授業内で行なうことも少なくない。この例としては、山梨県に見られる「無尽」に関する説明や、2014年2月の豪雪災害に関する授業が挙げられるだろう。特に前者については、飲食関係のアルバイト先で「無尽」の語を目にして不思議に思っていた他県出身学生が少なくないようであり、関心が集まった様子であった。こうしたミクロな視点は地域に関する学習として大切なことで、これまでもこの部分に注力してきた。

同時に、このところやや別の視点を取り入れるよう試みてもいる。地域に関する「鳥瞰的」な視点を同時に持つことである。具体的には統計を用いて他地域との比較を行ない、いま、私たちがいるこの地域にはどのような特徴があるのかを把握することである。これは昨年度から始めた試みであるが、平成31～令和元年度はさらにもう一歩進め「データ・サイエンス」の入門的内容を授業に導入してみた。

具体的にはこの地域の生活に関する拙稿(山口, 2018)について、内容紹介を行ないながら、そこで用いられている「統計的検定」という考え方について、ごく入門的な内容を解説した。またその計算にあたっては、よく用いられるマイクロソフト・エクセルの他、無料で用いることのできるアプリケーション(Rなど)があることを紹介した。Rはプロ・ユースにも十分対応できるアプリケーションである。その機能を100%活かすことはなくとも、そうしたアプリケーションがあり、統計的な地域把握を行なうにあたって意味があることを知っておくだけでも意義は大きいのではないかと考えたため紹介を行なったものである。

地域に関する内容紹介から発展した「データ・サイエンス」的内容については、その意義が受講者に十分伝わったかどうかはなお検討の余地があるだろう。同時に、既存統計の処理に加え、サンプリングをとまなう計量的調査が各地の自治体で広く行なわれていることを念頭に置いている。そのような状況下では統計的検定に関する基本的知識は地域に関わるうえで今後不可欠なものになっていくように思われるからである。これはいわゆる「EBPM (evidence based policy making)」の流れ(下記、内閣府ウェブサイトを参照)を見すえたものでもある。

繰り返しになるが、実際の事例や体験に基づいた地域に関する学習がきわめて大切であるという筆者の基本的スタンスにはまったく変更はない。そのうえで、ひとつひとつのエピソードは、地域の特徴の中でどこに位置付くのかを考えることはたいへん有意義である。特に本学の学生の出身地が全国各地にわたっていることから、学生間での地域間比較は日常的な会話においてもたいへん盛んであるといえる。地域間比較はエピソードのレベルでも興味深いものだが、実際のデータを参照しつつ行なうデータに基づいた比較に関するノウハウも大切にしてほしいと願うものである。

【文献・資料】

内閣府ウェブサイト (<https://www.cao.go.jp/others/kichou/ebpm/ebpm.html>、令和2年6月15日確認)

山口博史, 2018, 「非大都市部への〈移住〉者による地域的ライフスタイルの受容: 山梨県都留市の調査から」, 『地域社会学会年報』, 30:65-79.

(文責: 山口博史)

(2)「地域交流研究Ⅱ」－生きものの地図をつくる－

地域交流研究Ⅱでは、2011年より前期に「生きものの地図をつくる」をテーマに、身近に見られる生きものの分布調査を実施している。定量的な調査をおこなうことで、季節の変化にともなう生きものの動態を把握し、ここで得られた情報を地域に公開する手法を学び、生きものの地図が地域交流に果たす役割を考察することが授業の目的である。

2019年も受講生の人数調整を行ない、30名ほどでツバメ、イワツバメ、ハルゼミ、カエル類の調査を実施した。6班（1班は3～7名ほど）にわかれて調査をするが、例年、事前に用意した簡易図鑑を配布し、生きものに詳しくない学生にもデータが取れるように配慮している。生きものの地図を作るにあたっては、対象とした種の識別とその生きものがいつ、どこに、どのくらいいたのかを把握することが重要になる。種名が不確かで数量的な記録を伴わないデータは情報量が乏しい。そのため、調査対象の種を正確に識別し、個体数を記録することが重要である。

この授業では野外に出て調査をすることに重きを置いている。生きものに関する知識は、本やインターネットを介して、室内に居ながらにして触れることができるが、自分の足を使って得た情報はとても大事で、直接的な多くの学びはこのような経験のなかにあると考えるからである。受講した学生には、大学周辺の身近な自然に触れ、その意味を考える時間を持ってもらいたいと願っている。

班ごとに調査を行なった後はまとめをして、各班1枚のパネルを作製する。ここで作製したパネルは、都留文科大学前駅の待合室や学内に展示し、その成果を広く公開することに努めている。調査、まとめ、パネル作製という一連の作業をこなすことで、調査対象を知り、調査結果から明らかになったことを理解し、その成果を公開することには、どのような意味があるのだろうか。自分たちが行なった調査から得られた情報を多くの人々に知ってもらうための工夫の仕方、その楽しさ、重要さに気づいていただけたら幸いである。

2019年は、2018年に実施できなかったカエル類の調査が行なえたのが良かった。しかし、トノサマガエルは1箇所では確認できなかった。2015年～2017年までは概ね4箇所で記録されている。トノサマガエルは個体数の減少が著しい種であり、環境省と山梨県のレッドデータブックでは準絶滅危惧種となっている。これまでの調査により、水田環境や農業形態が現状のまま続くことがトノサマガエルの個体数を維持することに繋がると考えられた。引き続き調査を実施して、どのような条件の場所にトノサマガエルが多く生息するのかを明らかにする必要がある。なお、山梨県のレッドデータブックでは、県東部からの本種の生息記録は記載されていない。

今後は希少種や外来種の分布状況についても調査を行ない、その結果を学内はもとより都留市内にも広く公開していきたいと考えている。

(文責：西 教生)

(3) 「地域交流研究Ⅲ」—授業とセットで現地を歩く—

今年度の地域交流研究Ⅲは台風によって大きな影響を受けた。特に、前半でその影響が著しかった。とりわけ第2回で山梨県庁からゲスト講師を迎えることを想定した授業設計になっていたことが大きかった。山梨県に関するあらましをその回に学ぶことを想定していたからである。しかしながら台風(19号)の影響によりその回を休講(後に補講)とせざるを得なかったことで、受講生(本学の特性として山梨県出身者以外が多数にのぼる)への情報提供への影響を少なからず感じざるをえなかった。そのため、県外出身者に関しては筆者のほうから随時情報提供を行なうことで、無理なく授業についてこられるようはかった。

教室では次のような内容を扱った。

「山梨探索」実地での経験をどのように大学での学習につなげるか／富士登山の歴史／山梨と富士山／織物産業について／山梨の歴史／都留市の現状と将来構想／山梨のワイン／宝飾品産業について／交通と観光／山梨県の方言／山梨県と観光振興

また本年度は次の日程で現地を歩いた。

11月16日(土)(富士山方面) 忍野八海、河口浅間神社、大石紬伝統工芸館・河口湖大石公園、精進湖、富士山世界遺産センター、西湖など

11月30日(土)(博物館・史跡方面) 山梨県立博物館、笛吹川フルーツ公園、山梨ジュエリーミュージアム、尾県郷土資料館、猿橋など

歩く場所の選定にあたっては、授業との関係を重視した。例を挙げるならば、宝飾品産業に関する授業との関わりで、甲府のジュエリーミュージアム見学はたいへん有意義なものとなった。交通や観光との関わりでは、忍野八海や富士五湖(今回は河口湖と西湖、精進湖)では多くの外国人観光客の訪問がある状況を目のあたりにすることができた。織物産業との関係で大石紬の資料館を訪れたことを挙げることもできるだろう。山梨の歴史については笛吹市にある県立博物館や都留市の尾県郷土資料館の展示をもとに振り返ることができたように思う。

なおこれまで富士山については天候の見通しが事前には立ちづらいこともあり及び腰だったが、今回取り上げることにしてみた。曇天で眺望がないときに備え、各地を歩きながらの解説をふんだんに用意するなどの準備を整えてのものであった。結果として晴天に恵まれ、眺望を得ながら用意した解説を行なうという最高の状況を提供できたと考えている。

また、他県出身の学生が山梨県内を歩くという経験そのものがやはり多くないようであり、現地を歩く意義はかなり大きいことが推察される。また日程の関係上駆け足で回らざるをえないのは毎回心苦しく思っているところである。

なお、この形態(教室での授業、イベント参加、現地視察およびレポート)での授業は県の「やまなし観光カレッジ」に関する補助が終了したため、本年度が最後となることを書き添えておきたい。

(文責：山口博史)

(4)「地域交流研究Ⅳ」―地域の自然を観察し記録する―

1. 授業の概要

「地域交流研究Ⅳ」は、昨年度まで地域の自然や文化をテーマとした観察・取材をおこない、それを記事にしてまとめるという実践的な授業を展開してきた。地域での体験を言語化し、互いに記事を読みあい、最終的には冊子にして市民に届けることで学生の地域についての学びの深化だけでなく市民との自発的な交流を生み出すことを目標としていた。

今年度から文学部3学科横断履修モデルの1科目として位置づけられたこともあり、本授業では「地域を観察し記録する」という従来の目標は保ちつつ、富士山周辺の動物を含む地域の身近な自然の理解をテーマとした授業構成とした。特に全国的に農業や林業など環境面だけでなく社会的な問題にもなりつつあるニホンジカやイノシシなど大型哺乳類との共生の問題などを理解するには、哺乳類の行動・生態など基本的な理解が必要となる。そこで、本授業では、哺乳類の生活の痕跡（足跡や食べ痕）などから動物の生態や行動を読み取る手法を学び、自然との共生のあり方や富士山周辺の自然の現状について実地に学ぶことを目標とした。そのためできる限りキャンパス周辺の自然にじかに触れ、観察するフィールドワークを授業に取り入れた。

学生からは次のような感想が寄せられた。

「授業で植物などのことを聞いているだけでなく、実際に見に行けたことがとてもよかった。自分の目で見ることで強く印象に残るし、理解できました」

「実際に見て説明を聞くほうが感動が大きかったです」

「大学で受けた授業の中で一番新鮮な授業だったと思う。物の見方や視点が大きく変わって楽しい授業だった」

「フィールド体験を通して、海外の自然環境についても見てみたいと思うようになりました。そこで生きている植物、動物の姿を記録したいと感じました」

「自然も動物も好きだったので本当に楽しく授業を受けました。フィールドでの学習からも得るものがたくさんあり充実した内容の濃いものとなりました」

「生命の大切さを改めて認識できる良い授業でした。じっさいに触ったり匂いをかいだり、観察できる授業で、話を聞くよりも印象に残ったし、自然のすばらしさを改めて実感できる授業でした」

本授業では、野外での観察を重視するため当初、20名程度の少人数での授業を想定していた。受講者は68名であった。自然観察をするさいに、フィールドへの影響も考慮するとやはり20名程度の少人数での授業が望ましい。実際、受講した学生からも、大人数でのフィールドワークはやりにくい、という意見もあった。そのあたりを配慮しながら来年度の授業を進めていきたい。

(文責：北垣憲仁)

Ⅳ．地域貢献活動

Ⅳ－１．山梨県南都留地域教育フォーラム

概 要

南都留地域教育フォーラムは、「地域の子どもたちは、地域で育てる」という基本理念のもと、この地域の教育関係者が一堂に集まり、『連携活動』『交流活動』を軸に、報告と意見を述べあう場として開催されている。毎年、教育委員会・校長会・教頭会のほか、各学校・幼稚園・保育園やPTA及びPTA連絡協議会、保育所保護者会、青年会議所、商工会議所、商工会など数多くの団体の参加者によって、様々な立場からの意見交換を行い、今日的な課題への対応や解決を目指す機会となっている。

開催形式は全体会と分科会の２部構成となっており、全体会では開会行事やアトラクション（地域の子どもたちの音楽活動の紹介など）を行い、分科会では『連携活動』『交流活動』をキーワードとする実践活動報告の発表を基に研究討議が行われている。

22回目となる令和元年度は、11月1日に富士吉田市立下吉田中学校・市立下吉田コミュニティセンター・南都留教育会館の３か所を会場にして行われた。

今回も200以上の団体から300名を超える参加者があり、全体会のアトラクションでは河口湖南中学校の生徒による「ソーラン節」が披露された。分科会ではそれぞれのテーマに基づき、各2名の提案者による事例発表と、参加者による研究討議が行われた。また本学教員が助言者として6つの分科会に出席し、発表と討議の内容を踏まえて助言等を行った。

令和元年度 南都留地域教育フォーラム分科会 助言者

分科会	部会名	所属	学科	職・氏名
第1分科会	幼稚園・保育園（所）・小学校部会	都留文科大学	学校教育学科	教 授 中川佳子
第2分科会	小学校・中学校部会	都留文科大学	教職支援センター	特任教授 泉 宜宏
第3分科会	中学校・高等学校部会	都留文科大学	教職支援センター	特任教授 宮下 聡
第4分科会	小学校・中学校・高等学校児童生徒会	都留文科大学	学校教育学科	教 授 西本勝美
第5分科会	行政・地域団体・学校部会	都留文科大学	地域社会学科	准教授 鈴木健大
第6分科会	特別支援教育部会	健康科学大学	福祉心理学科	講 師 渡邊隆文
第7分科会	PTA 部会	都留文科大学	学校教育学科	教 授 廣田 健

Ⅳ－２．都留市放課後子ども教室事業

１．「都留市放課後子ども教室」事業について

本事業は、文部科学省の「子どもの居場所づくり事業」（平成 16 年度）および「地域教育力再生プラン」（平成 17・18 年度）を発展的に引き継ぎ、都留市子ども協育連絡協議会を推進主体として、都留市教育委員会生涯学習課が事務局を担って実施している事業である。令和元年度は 6 つの小学校区（東桂、宝、谷村第二、旭、禾生第一、禾生第二）を中心に、学校の体育館やグラウンド、図書室等に安全・安心に活動できる拠点を設け、地域の住民、大学生、社会教育関係者などを活動指導員として配置し、放課後や週末などにおける遊び、スポーツ、体験活動、学習支援などの活動を行った。

２．今年度の活動状況

地域交流研究センターでは、都留市教育委員会からの依頼を受けて、活動指導員として協力してくれる学生を募集している。平成 27 年度までは、個々の活動ごとに募集をかけて学生が直接申し込む形式だったが、申し込みの多い活動とまったくない活動に分かれてしまい、調整が難しかった。

そこで平成 28 年度からは、センターが活動指導員として参加を希望する学生をあらかじめ募集して登録を行い、申告してもらった特技や趣味等から、個々の活動の際に教育委員会が適当な学生に直接参加を依頼する、という方法を取るようになった。

今年度は 59 名の学生から参加申し込みがあり、放課後子ども教室事業で行われた 185 回の活動のうち、62 回の活動に延べ 317 名の学生が参加し、子どもたちをサポートした。

令和元年度放課後子ども教室学生参加状況一覧

「旭子ども教室」 (旭小学校)	開催日	活 動 内 容	活 動 場 所	学生
	6月16日	文大子ども公開講座 サッカー教室	都留文科大学	3名
	7月27日	文大子ども公開講座 木工教室	都留文科大学	7名
	7月28日	文大子ども公開講座 陶芸教室	都留文科大学	7名
	8月6日	文大子ども公開講座 読書の新しいカタチ	都留文科大学	7名
	8月7日	文大子ども公開講座 理科実験教室	都留文科大学	2名
	8月9日	戸沢の川で遊ぼう！	戸沢公園	13名
	9月24日	バスに乗って道の駅に行こう！(禾一と合同)	道の駅つる	2名
	9月24日	番長と遊ぼう！（禾一と合同）	道の駅つる	2名
	10月30日	さつまいも掘り	旭ファーム	5名
	12月18日	読み聞かせ・スクラッチアート	盛里地域コミュニティセンター別館	8名
	12月25日	クリスマス会・クリスマスツリーを作ろう	与縄営農指導センター	2名
	1月8日	まき割り・とん汁を作ろう(三吉と合同)	谷二小校庭	2名
	1月8日	たこ作り・たこあげ（三吉と合同）	谷二小校庭	2名
	2月12日	バレンタインチョコ作り	与縄営農指導センター	4名
	合計①			66名

「三吉子ども体験教室」(谷村第二小学校)	開催日	活 動 内 容	活 動 場 所	学生
	5月29日	さつまいもの苗さし・遊び	校庭横の畑	8名
	6月12日	番長と遊ぼう！	図工室	8名
	6月16日	文大子ども公開講座 サッカー教室	都留文科大学	3名
	6月26日	スライムを作ろう！	図工室	4名
	7月10日	農の生け花	校庭横の畑	3名
	7月17日	じゃがいも掘り ゆでて食べよう！	校庭横の畑	4名
	7月27日	文大子ども公開講座 木工教室	都留文科大学	7名
	8月6日	文大子ども公開講座 読書の新しいカタチ	都留文科大学	7名
	8月7日	文大子ども公開講座 理科実験教室	都留文科大学	2名
	8月20日	プラバン工作	図工室	2名
	8月28日	自由遊び	校庭	1名
	9月10日	山歩き	学校～都留カントリー～引野田	1名
	9月26日	番長と遊ぼう！	校庭	2名
	10月9日	グランドゴルフ	校庭	4名
	10月23日	自由遊び	校庭	4名
	1月8日	まき割り・とん汁を作ろう(旭と合同)	谷二小校庭	3名
	1月8日	たこ作り・たこあげ(旭と合同)	谷二小校庭	3名
	1月29日	番長と遊ぼう	体育館	2名
	合計②			68名

「桂子ども教室」(東桂小学校)	開催日	活 動 内 容	活 動 場 所	学生
	6月16日	文大子ども公開講座 サッカー教室	都留文科大学	3名
	7月10日	ゲートボール	東桂小グラウンド	9名
	7月27日	文大子ども公開講座 木工教室	都留文科大学	7名
	7月28日	文大子ども公開講座 陶芸教室	都留文科大学	7名
	8月6日	文大子ども公開講座 読書の新しいカタチ	都留文科大学	7名
	8月7日	文大子ども公開講座 理科実験教室	都留文科大学	2名
	8月7日	絵画 増田誠展にむけた絵画の制作	東桂コミュニティセンター	1名
	8月9日	絵画 増田誠展にむけた絵画の制作	東桂コミュニティセンター	1名
	12月14日	ものづくり 消しゴムはんこを作ろう！	東桂コミュニティセンター	3名
	1月7日	ものづくり 木工工作	東桂コミュニティセンター	3名
	合計③			43名

「宝っ子クラブ七里」 (宝小学校)	開催日	活 動 内 容	活 動 場 所	学生
	6月16日	文大子ども公開講座 サッカー教室	都留文科大学	3名
	7月27日	文大子ども公開講座 木工教室	都留文科大学	7名
	7月28日	文大子ども公開講座 陶芸教室	都留文科大学	7名
	8月6日	文大子ども公開講座 読書の新しいカタチ	都留文科大学	7名
	8月7日	文大子ども公開講座 理科実験教室	都留文科大学	2名
	8月7日	アート それぞれの同心円を描く	多目的ホール	3名
	8月9日	都留文大子まつり企画 水鉄砲作り & 室内遊び	多目的ホール	3名
	8月19日	都留文大のアウトフitter企画 お祭り遊び	多目的ホール	12名
	11月13日	宝の山の番長とたき火	宝小グラウンド	9名
	12月11日	ものづくり ビーズのクリスマスリース	多目的ホール	4名
	12月18日	ものづくり ビーズのクリスマスリース	多目的ホール	4名
	2月5日	都留文大子まつり企画 プラバンを作ろう	多目的ホール	4名
	合計④			65名

「禾一わくわくクラブ」 (禾生第一小学校)	開催日	活 動 内 容	活 動 場 所	学生
	6月12日	自由に遊ぼう！	禾一小グラウンド	5名
	6月16日	文大子ども公開講座 サッカー教室	都留文科大学	3名
	6月22日	ホテルの観察会	小形山周辺	12名
	6月26日	番長 ㄧㄧ(〽)ㄧㄧ 川でお散歩を しよう！	禾一小付近の川	5名
	7月10日	プラバン工作をしよう！	禾一小図工室	5名
	7月27日	文大子ども公開講座 木工教室	都留文科大学	7名
	7月28日	文大子ども公開講座 陶芸教室	都留文科大学	7名
	8月6日	文大子ども公開講座 読書の新しい カタチ	都留文科大学	7名
	8月7日	文大子ども公開講座 理科実験教室	都留文科大学	2名
	8月9日	夏休みの工作をしよう！	禾一小図工室	3名
	8月19日	番長 ㄧㄧ(〽)ㄧㄧ 川で遊ぼう！	禾一小付近の川	1名
	8月21日	つるっ子探検隊出動！(禾二と合同)	谷二小体育館	15名
	9月24日	バスに乗って道の駅に行こう！(旭と合同)	道の駅つる	2名
	9月24日	番長と遊ぼう！(旭と合同)	道の駅つる	2名
	10月2日	しょうぎ、オセロ、トランプをしよう！	禾一小特活室	4名
	10月23日	スライムを作って遊ぼう！	禾一小図工室	5名
	11月13日	自由に遊ぼう！	禾一小グラウンド	4名
	12月4日	石けんデコパージュをしよう！	禾一小図工室	8名
	12月25日	クリスマスパーティを楽しもう！	禾生地域コミュニティセンター	5名
	1月22日	番長 ㄧㄧ(〽)ㄧㄧ 雪遊び！？	禾一小グラウンド	3名
	合計⑤			105名

「禾二つ子クラブ」 (禾生第二小学校)	開催日	活 動 内 容	活 動 場 所	学生
	6月16日	文大子ども公開講座 サッカー教室	都留文科大学	3名
	6月19日	番長 ㊦(〰) ㊦ 自由に遊ぼう！	禾二小グランド	8名
	7月3日	番長 ㊦(〰) ㊦ 自由に遊ぼう！	禾二小グランド	8名
	7月17日	スライムを作って遊ぼう！	禾二小図工室	9名
	7月27日	文大子ども公開講座 木工教室	都留文科大学	7名
	7月28日	文大子ども公開講座 陶芸教室	都留文科大学	7名
	8月6日	文大子ども公開講座 読書の新しいカタチ	都留文科大学	7名
	8月7日	文大子ども公開講座 理科実験教室	都留文科大学	2名
	8月21日	つるっ子探検隊出動！(禾一と合同)	禾二小	15名
	8月22日	番長 ㊦(〰) ㊦ 川を探索しよう！	桂川	3名
	10月9日	番長 ㊦(〰) ㊦ 英語で気持ちを をはきだそう！	禾二小ホール	9名
	10月16日	将棋、オセロなどのゲームをしよう	禾二小ホール	8名
	11月6日	外で自由に遊ぼう！	禾二小グランド	8名
	12月11日	正月飾りを作ろう！	禾二小ホール	9名
	1月15日	科学を楽しもう！～浮沈子で魚釣り～	禾二小図工室	9名
	合計⑥			112名

①+②+③+④+⑤+⑥) 小計⑦	459名
子ども公開講座、合同開催等の重複分⑧	142名
学生延べ参加者数 (⑦-⑧)	317名

Ⅳ－３．文大ボランティアひろば

１．文大ボランティアひろばとは

文大ボランティアひろば（通称：ぼらひろ）とは、地域交流研究センターと都留市社会福祉協議会との話し合いの中から生まれた「ボランティアをとおして交流できる場」のことである。平成20年度から1カ月に1回のペースで開かれており、本学のボランティアサークルを中心に、地域交流研究センターと社会福祉協議会の職員やボランティアの協力を呼びかけたい地域の方が参加して、緩やかな連絡協議会的な会合を行っている。

会合の内容は、前回の会合以降の各サークルからの活動報告、地域交流研究センターや社会福祉協議会からのボランティアニーズの情報提供、各団体からの協力呼びかけや新事業の提案、地域の方からの直接のボランティア募集の告知などが中心である。社会福祉協議会にとっては、とりわけ大学生対象のボランティアニーズを持ち込む「窓口」ができたことが大きく、各サークルにとっては、相互の活動に触れて刺激を受け合えることや、これらを通じて活動が活性化されることが大きい。ただし、ボランティアを行う際には次の点に気を付けなければならない。

- ①ボランティアはあくまで自発的なものでなければならず、大学やセンターが押し付けるものではない。
 - ②それぞれのサークルの個性や独自性を最大限に尊重し、新たな負担をかけない。
 - ③活動の蓄積のある既存サークルこそが新しい取り組みの中核である。
- 平成 31 年度の文大ボランティアひろばは、計 5 回開催した。

2. 学生サークルについて

今年度のぼらひろには、「ボランティアサークル つくしの会」、「Σソサエティー」、「いこいのひろば支援サークル IKI」「カンボジア支援サークル Plenty」や「つるっ子プロジェクト」の参加があった。各サークルの主な活動は次の通りである。

「つくしの会」では、障がい者施設の訪問や献血推進活動などの福祉系のボランティアを中心に、地域に根ざした活動をしている。「Σソサエティー」では、文大周辺の道路・ゴミ捨て場で朝のゴミ拾い活動を定期的に行っている。「IKI」は、いこいの広場を支援するサークルで、障がいのある方や地域の方との交流を深める場を企画・運営している。「いこいのひろば」は、ぼらひろの中で、福祉施設の職員の方から「障害のある方が学生や市民と交流できる機会をつくってほしい」との声を受けて平成 22 年 10 月にできた交流の場である。「カンボジア支援サークル Plenty」はカンボジアの子どもたちに本を届けるために図書館建設を目的とした募金活動などを行なっている。「つるっ子プロジェクト」は東桂地区の耕雲院で月 1 回地域の居場所「つる食堂」の運営を行なっている。

また、これらの学生サークルは個々の活動以外に、共同で取り組む活動も行っている。それが世界の子どもたちにワクチンを届けるためのペットボトルキャップの回収である。大学内には回収ボックスが設置されており、各サークルが当番で回収し、ぼらひろ開催時に都留市社会福祉協議会の職員に渡している。

3. 地域交流研究センターにおけるボランティア募集

地域交流研究センターでは、主にサテライトを窓口としたボランティア募集も行っている。今年度は、イベント参加などの依頼が計 3 件あり、学内の掲示板・学内サイト・ぼらひろを中心に参加したい学生を募集してきた。人の出入りが多い 1 号館に、ボランティア告知用の掲示板を設置したことで、ぼらひろに参加していない学生にも周知することができた。

4. 今後の課題

ぼらひろは平成 20 年度から継続して開催されているが、毎回参加している団体のほかに参加者がほとんどいないのが現状である。特に今年度は全く参加者がいない回も数回あった。

そのため、ぼらひろのあり方を考える会として、令和 2 年 1 月 22 日に第 15 回地域交流研究フォーラム『多様な立場でつながる地域—学生ボランティアの視点から—』を開催し、これまでのぼらひろの振り返りと都留市のボランティア状況の確認、今後ぼらひろをどのような場にしていったらよいか、地域交流研究センター、社会福祉協議会、ぼらひろに参加している学生団体のメンバーや市内でボランティア活動を行っている方々と共に話し合いを行った。

来年度以降、社会福祉協議会と話し合いを進め、ボランティアひろばの改革を行っていく予定である。

(文責：事務局)

Ⅳ－４．地域交流研究センターサテライト

１．地域交流研究センターサテライトについて

平成 25 年度に都留市まちづくり交流センター内に設置された都留文科大学地域交流研究センターのサテライト（分室）である。サテライトでは地域の方々に大学をより身近に感じてもらうことや、大学と市民との交流促進を図ることを目的に活動している。

２．今年度の活動状況

サテライトの主な活動は、大学と地域をつなぐ窓口として、ボランティアの募集や地域の講演会への講師派遣依頼、学生のイベント開催の支援などである。2019 年度に行った主な活動は、以下の通りである。

- ・放課後子ども教室学生スタッフ募集
- ・第 43 回都留市公民館合同開級式講師依頼受付（佐野夢加本学特任講師）
- ・谷村地域協働のまちづくり推進会「夢実現ひろば」参加団体募集
- ・はつらつ鶴寿大学ボランティアスタッフ募集
- ・家庭・地域の教育力を高めるフォーラム講師依頼受付（鈴木健大本学地域社会学科准教授）
- ・2019 年度田原神社秋季大祭前夜祭参加者募集（cafe sowers・YEH 山梨・都留 JAZZ 倶楽部・フラダンスサークル Moani）
- ・暮らしに役立つみんなの広場講師募集
- ・盛里ふれあいの集い参加団体募集（フラダンスサークル Moani）
- ・つる産業祭り参加団体募集
- ・つるぶんカフェ（第 1 回：鈴木武晴本学国文学科教授）
- ・第 18 回市民俳句かるた大会ボランティア募集
- ・ボランティアひろば告知
- ・地域交流研究センターブログ運営（イベント開催告知・報告）

谷村地域協働のまちづくり推進会が地域住民の生きがいをづくりを目的に開催している「夢実現ひろば」において、9 月 19 日、地域住民と大学生との交流を目的とした「大学生との交流 管弦楽団演奏会」の開催に協力した。

「暮らしに役立つみんなの広場」では、本学学生との交流として、9 月 21 日に「都留文科大学管弦楽団」、1 月 18 日に「都留文科大学ボードゲームサークル策士」、2 月 22 日に「落語研究会」の 3 回にわたって学生サークルを講師に迎え、イベントを開催した。とくに「ボードゲームサークル策士」のイベント当日は、朝から雪が降るという悪天候にもかかわらず 15 名の参加者があり、ボードゲームに対する興味の高さがうかがえた。

都留市中央公民館主催「はつらつ鶴寿大学」における学生ボランティアの募集を行ない、のべ 12 名の学生の参加があった。

また、今年度は新たな活動として、「つるぶんカフェ」の開催を行った。つるぶんカフェは都留文科大学と地域の方々との交流の場を作るために、地域交流研究センターサテライトと共生教育研究部門（社会教育）が共同で開催する事業である。地域交流研究センターではこれまで大学内で市民公開講座を開催してきたが、会場が大学なので参加しにくい、という意見があったのも事実である。そこで新たな試みとして会場を市内のカフェに設定し、より

参加しやすい学習と交流の場を創設することを目的として「つるぶんカフェ」が開催されることとなった。

第1回目はテーマを令和にちなんで「万葉集」とし、講師として万葉集を専門に研究されている鈴木武晴本学国文学科教授をお招きして、11月9日に開催した。会場は「BAKERY CAFE いちごいちえ」である。俳句や短歌を学んでいる方など、11名の参加があった。参加者からはカフェなので参加しやすい、という意見が一定数あったので、目的の1つである「参加しやすい場であること」は達成できたと思われる。なお第2回のつるぶんカフェは3月15日開催予定であったが、新型コロナウイルス感染症流行拡大のために中止となった。令和2年度以降開催予定である。

地域交流研究センターブログにおいて、地域のイベントに参加する学生たちの活動取材し掲載した。鶴寿大学学生ボランティアやみんなの広場、各部活動の地域での活動の様子は、このブログで紹介されている。また、都留市まちづくり市民活動支援センターと協力し、学生が地域で行うイベントや市内で行われるイベントの告知を行なった。このほかにも大学を市民に周知するための活動として、大学のイベントの案内やポスターをまちづくり交流センターに掲示し、フィールド・ノート、大学案内の配架を行った。

3. 来年度の活動について

サテライトの存在をもっと多くの方に知ってもらい、広く活用してもらうために、ポスターやパンフレットを使用してサテライトの周知活動を行なう。また、学生・市民から寄せられる相談・依頼への柔軟な対応を目指し、学生と市民との交流の場を増やす活動を行なう。さらに、公民館及びまちづくり交流センターでの活動に活発に参加してもらうために、活動参加者を学内で募集する予定である。

(文責：事務局)



Ⅳ－5. 市民公開講座

地域交流研究センターの部門活動として実施したものは「Ⅱ. 各部門の活動」に、また現職教員養成講座と子ども公開講座については「Ⅲ. インターフェイスとメディアの活動」に掲載したため、ここではそれ以外のものについて報告する。また『文大名画座』についても、平成31年度より市民公開講座として実施することとなったため本項にて報告する。

○市民公開講座 文大名画座「人生、ここにあり！」上映会

【日程・会場等】

日 時：令和2年1月29日（水）18時30分～21時

場 所：都留文科大学2号館101教室

社会的意義のあるテーマをコミカルに描いた映画というものはあるものだ。今回とりあげたイタリア映画「人生、ここにあり！」（国内公開2011年）はそうした作品の一例である。上映は、映画を鑑賞する際のポイントを簡単に解説し、その上で映画鑑賞を行なった。またセンターの構成員である堤先生からも上映に先立ってコメントを頂戴した。

上映前の解説に、毎回かなりの苦心をする。核心部を話してしまうわけにはいかないし、かといって通り一遍の表面的な解説ではあまり意味がない。特に今回は、映画の趣旨に沿って、

イタリアのバザーリア法の解説から始めることはすんなり頭の中に浮かんだが、そこから映画と関わりのある諸点をどこまで解説するか、パワーポイント作成に試行錯誤を重ねた。バザーリア法、障害学でいう「医学モデル」と「社会モデル」の概要、そして現代芸術（ネオ・ダダなど）について話をした。この映画を鑑賞するうえで大切なことである。またディテールとして、ニキ・ラウダとジル・ヴィルヌーヴ（この時代に活躍したF1レーサーたち）のことも触れた。ヴィルヌーヴはレース中の事故で帰らぬ人となり、ラウダは重大事故から奇跡ともいえるべき復活を遂げたレーサーである。この二人を本作品で取り上げているのには、時代的背景もあろうが、二人の生き様を作品に投影する意図もあったのではないかと（私見である）とも思う。

上映後、感想を私に直接言ってくくださる方もいた。総じて良い映画会だったように思う。

（文責：山口博史）



令和元年度 市民公開講座 文大名画座

【日 時】令和2年1月29日（水）
18:30～21:00（18:00～受付）

【場 所】都留文科大学 2号館2101教室

【参加費】無料（どなたでも参加できます。）

本学の地域交流研究センター 山口博史准教授によるわかりやすい解説付きで上映します。
申込方法①大学ホームページの**専用ページ**（Events）で申し込む。 QRコード
②下記の申込先に**メール**で申し込む。
③QRコードで申し込む。

※メールでお申込みの際は、お名前、市町村、連絡先をご記入ください。
（都留文科大学の学生は学科、学年もお願いします。）

都留文科大学 地域交流研究センター
0554-43-4341 内線（606）
okounu@tsuru.ac.jp

都留文科大学

市民公開講座「文大名画座」ポスター

○市民公開講座 文大名画座「かすかな光へ」上映会 ～大田堯先生からの贈り物 昭和から平成、そして令和へ…～

【日程・会場等】

日 時：令和元年7月10日（水）18時30分～21時

場 所：都留文科大学2号館101・102教室

参加者：43名

【講座の概要】

平成31年2月に開催した地域交流研究フォーラムにおいて、組織改革を機に当センターの思想の原点を見つめ直す目的で、大田堯元学長のドキュメンタリー映画「かすかな光へ」を基調講演として上映した。その際には多くの市民・教員の参加を得られたが、時期的に学生の参加が少なく、他学科からも学生に見せたいという声がセンターに寄せられていた。

今回、国文学科の野中潤先生のゼミ生（4年）から、教員採用試験の前に多くの学生と大田先生の教育哲学・思想を共有する機会を作りたいので、「かすかな光へ」の上映会を開催したいという相談があった。学生から声が挙がったこと、当センターの実践・思想の原点を学生と共有する契機となることなどからこれを受け、国文学科との共催で市民公開講座として上映会を企画することとなった。

当日は、講座の司会など学生たちが主軸となって上映会の進行を行った。上映の前に「あなたにとっての「幸せの形」はなんですか？」というお題をだし、参加者の頭の中で考えていただき、絵や文章を使って自由に描いて周りの人と共有してもらった。また上映後には、元地域交流研究センター長で大田先生とのかかわりの深かった杉本光司先生（情報センター特任教授）からご挨拶をいただいた。終了後、映画の感想や交流を通して考えたことなどを自由に記述し、会場内のボードに張り付ける形で共有を行った。

【参加者の感想】

- ・教育は教えることではなく、自ら変わる力を助けることだという言葉に共感した。大人だからといって、正しさを知っている訳ではなく、子どももひとりひとり違うわけで、だから、手助けするとか、一緒に考える表現は理想だと感じた。
- ・教師を目指し始めた頃の気持ちがよみがえってきて、日々の忙しさに埋没している自分を反省しました。教育の本質とは何か、教育にとって大切な事は何かに、改めて思いを致すことができました。人を命を、大切に教育をしていかななくてはと思うと同時に、まずは、人としての自分自身の更なる成長・向上を目指したいと思いました。貴重な機会を得ることが出来たことに感謝しています。
- ・学生からの企画で実現できたことが非常に大きな成果だと感じました。大田先生の「思い」が教員として巣立っていく学生たちの心に生き続けてくれることを願っています。
- ・大田先生がインタビューで語られた「教育とは新しい問題にぶつかる準備」という言葉が印象に残りました。自分で問題を解決する力を身につけるために、今からは課題解決型の学習が取り入れられる必要があると感じました。
- ・現代の社会の中では感じられない感性や、教育の感覚を問い直されたように感じた。どう教育するかというよりは、教育の根本とは、について考えた。

- ・生涯を教育者として生きたとても素晴らしい先生だと感じました。基本的人権の話での他者との違いがあるという事を理解するとあった通り、以前アンガーマネジメントの講演を聞いた時、他者と許容出来る気持ちを広げることで感情をコントロール出来ると学びました。今回の講座を受けてその通りだと感じました。大田先生が学長だった大学で学べる学生さんがうらやましいと感じました。
- ・教育とは何か、人間とは何かについて深く考えることができたと思う。自分自身勉強をする上で、本やパソコンの情報にばかり囚われて、実際に現場で実物に触れたり、直接人と話し合いながら学びを深めたりという時間は少ないと思います。でも実際は直接実物に触れて、人間が持つ全ての感覚で学ぶことの方が大切な物を得られるのではないかと思います。これからはもう少し、自然の中で行う活動も増やしていきたいと思いました。また、もっと色々な人と関わり合える活動を増やしていきたいと思いました。自分の人生を考え直すことができました。ありがとう大田先生。
- ・自分が通っている大学の元学長がどんな人だったのか、どのような教育方針をもっているのか少しでも知ることができてよかったと思いました。教育について勉強している身としては大田先生がどのような教育観をお持ちだったのかももう少し詳しく知りたいと思った。
- ・大田先生の生涯をかけての教育論、学習とは何かをほんの少しですが、知れた。植物も人間も同じでほんの少し手をさしのべるだけで自ら成長・学習する力を持っているということが印象的でした。
- ・大田先生からの贈り物を頂きました。それは、「かすかな光へ」向かって一步一步、私が歩んでいくことだと感じました。

(文責：事務局)

○市民公開講座「英語であそぼう！」

【日程・会場等】

日 時：令和元年7月27日(土) 10時30分～12時

場 所：都留文科大学3号館4階

参加者：29名

講 師：上原(かんばる)明子(学校教育学科教授)

【講座の概要】

昨年度に続いて、学校教育学科の上原明子教授と本学学生による市民公開講座「英語であそぼう！」を開催した。昨年度は都留市教育委員会の「放課後子ども教室」と連携した「子ども公開講座」として実施したが、本年度は本学主催の市民公開講座とし、市内の各小学校に告知を依頼して参加者を募集した。

当日は1年生から6年生まで29名が参加し、3グループに分かれて「色の部屋」、「動物の部屋」、「スポーツの部屋」の3つの部屋を回りながら、英単語の練習や、それを使ったクイズやゲームを行なった。「色の部屋」では、緑色のリンゴや白いイチゴなど、様々な色に塗られた野菜や果物の絵を見せて、それが本当にあるものなのか、それともないものなのかを当てる○×クイズや、色の名前のかかるた取りを行なった。また「スポーツの部屋」ではビン

ゴゲームを、「動物の部屋」では、3つのヒントクイズやジェスチャークイズを行なった。

【参加者の感想】

- ・どうぶつのくいずがたのしかった。(1年生)
- ・かるたがおもしろかった。なきごえクイズもたのしかった。(2年生)
- ・知っている英語もあったけれど、知らない英語があって、ここにきて良かったです。(3年生)
- ・一つ一つの部屋にちがうゲームや、おぼえられるようにくりかえし発音練習をしてくれてとても良かったです。(5年生)

○市民公開講座「佐野夢加かけっこ教室」

【日程・会場等】

日 時：令和元年12月1日（日）9時30分～11時30分

場 所：都留文科大学体育館

参加者：30名

講 師：佐野夢加（本学特任講師）

【講座の概要】

12月1日、都留市内の小学生を対象とした市民公開講座「佐野夢加かけっこ教室」を開催した。

本講座は、本学特任講師でロンドン五輪陸上競技日本代表の佐野夢加氏を講師に迎えて、平成28年度から毎年開催しているもので、今回は本学陸上部の学生2名が補助として参加した。

参加者は小学校1年生から6年生までの30名で、ウォーミングアップのランニングから始まり、ラインの上を走るライン走や、マーカー（小さな平べったいコーン）を利用したマーク走などによって、走るコツを身に着ける練習を行った。

【参加者の感想】

- ・あしがはやくなって良かったです。(1年女子)
- ・今日ならったことをたくさんれんしゅうして足をはやくしたい。(3年男子)
- ・ステップがむずかしかった。(5年女子)
- ・からだをうごかしながらあそびでたのしめたので良かったです。(6年女子)

(文責：事務局)

○市民公開講座「発達障がい生き抜くために」
～ ADHD・自閉スペクトラム症当事者が語る中学校から大学、
そして社会人になって見つけた居場所～
地域交流研究センター・保健センター共催

【日程・会場等】

日 時：令和元年 10 月 19 日（土）13 時 30 分～16 時

場 所：都留文科大学 5 号館 101 教室

参加者：67 名

講 師：中川佳子（学校教育学科教授）

ゲスト：飯田亮太（発達障害バーブラッツ副代表）

【講座の概要】

成人発達障がいの当事者をゲストに迎え、中学や高等学校、大学時代の悩み事や困りごと、就職後のさまざまなストレスとその後の退職。そして、現在、居場所を見つけて社会でやってきていることなどについてお話いただき、発達障がい当事者の苦しさやそれを受け入れて生き抜く難しさを、当事者やグレーゾーンの方、関係者の方に理解していただくことを目的にこれを企画した。

【参加者の感想】

- ・大人の発達障がいについて、くわしく知ることができました。特に学生時代の様子を知り、今度担当している子どもたちの指導に生かしていきたいと思いました。
- ・特別支援学校免許取得を目指している身です。発達障がいについての分かりやすい概論や、実際の体験談などをお聞きすることができて受講して良かったです。
- ・当事者の方の話を聞き、自分でもこんな特性があるある、と思い改めてとても身近なものなのだなと感じました。発達障がいと言われても個性であると思うこと、受け入れてくれる居場所があることがとても大切なのだと分かりました。お話が聞けて本当によかったです！
- ・概論を含め学習できてよかった。体験談も聞くことで他方面で考えることができた。
- ・幼少期から成人までの経験を経過的に聞かせていただき、良かったです。当事者しかわからない部分が聞けて良かったです。
- ・「発達障がい」について、理解が深まったように思います。そもそも具体的なことを何も知らなかったので、今回の講座を受けて良かったです。

（文責：事務局）

Ⅳ－6．「学級づくりの向上をめざす実践講座」の活動報告

令和元年度は、計7回にわたって開催された。

- ・第1回 4月27日（土）金勝武鑑（元公立中学校長）
座談会：いじめに挑む学級づくり2～金勝先生とみんなで考えよう！ いじめを乗り越える子どもの集団を育てるには～
- ・第2回 5月25日（土）長田絵美（双葉中学校教諭）
保護者を学級のサポーターに！ 信頼関係が広がる学級づくり
- ・第3回 6月22日（土）渡辺幸之助（河口湖北中学校長）
圧倒的な量のコミュニケーションで思春期に信頼の根を張る
- ・第4回 7月27日（土）丸山 優（甲府東小学校教諭）
とことんやりたい！ 学級担任のエネルギーで子どもを巻き込む
- ・第5回 9月28日（土）島袋あゆみ（吉田高校主任実習助手）
高校の放送部で主体性・気づく力を育て、本気にさせる指導
- ・第6回 10月26日（土）武井明子（わかば支援学校教諭）
特別支援学校高等部で人間関係形成能力を教科と学級活動を中心に育てる試み
- ・第7回 11月23日（土）堀内 弥（忍野中学校教諭）
生徒集団のもつ文化性を変えることで秩序を生み出す挑戦

令和元年度は、計126名の参加者があった。毎回、現職の教員のみならず、本学の学生も参加している。学生にとっては、大学の講義だけでは分からない学級づくりの具体的な方法や事例を学べるだけでなく、現職の先生方とも身近に交流できるということが魅力となっている。

令和2年度は、新型コロナウイルス感染防止のために4月～6月は休止して、7月から開催する予定である。

- ・第1回 7月25日（土）渡辺克吉（小立小学校教諭）
学級づくりの広がりを生み出す一日本学級経営学会に学ぶ
- ・第2回 9月26日（土）渡辺恭子（勝山中学校教諭）
クラスシステムの確立で、話し合いができる個と集団を育てる
- ・第3回 10月24日（土）渡辺幸之助（丹波中学校講師）
教員生活の楽しさと学級づくり―視野が広がると楽しみが広がる
- ・第4回 11月28日（土）小塚泰恵（河口湖南中学校教諭）
合唱団、合唱リーダーの育成で、より主体的で自治的な集団に

（文責：鶴田清司）

V. 地域交流研究教育プロジェクト

V-1. 食育つる推進プラン

申請代表者：学校教育学科 准教授 平 和香子

【目的】

都留市が第6次都留市長期総合計画で策定している「健康増進計画・食育推進計画」（2016年～）の重点目標「健康プロジェクトTSURUつる」（旧「食育つる推進プラン」）1～9に基づき、主に最優先課題とされている1. 栄養・食育分野について、学内における学生や地域の人々への食育の周知や活動の支援を大学生が積極的に取り組み、健康増進と食生活の意識改善に取り組むことを検討する。

【概要】

都留市食育推進計画の分野別目標である（1）食に関する正しい知識の普及と健全な食習慣を实践（2）食の大切さを理解し感謝の気持ちを育成（3）地産地消の推進と食文化の継承を普及、に基づき、本学大学生が市役所や都留市食生活改善推進員の方々にご指導をいただきながら、①大学生向けの減塩・防災料理教室、②のびのび興譲館クッキング塾での料理教室 ③市内保育園への食育教室 ④子ども食堂の支援、等に取り組んでいる。

【2019年度の報告】

（1）「都留市食生活改善推進員が教える大学生を対象とした減塩・防災料理教室」

日 時：2019年12月4日（水）

場 所：都留文科大学調理実習室（1105）

対 象：本学大学生

参加人数：38名（学生25名、市役所2名、都留市食生活改善推進員10名、教員1名）

内 容：食育推進計画分野別目標（1）に基づき、「生活習慣病予防のための減塩推進スキルアップ事業」として、市役所管理栄養士蒲地様、都留市食生活改善推進委員会の皆様等と共に、本学学生を対象とした、「減塩」の重要性を理解するための講座を行った。

2019年度は、台風による大規模災害があったことから、避難所でも実践できる防災食の減塩料理を実施した。

教室では、①減塩はなぜ若者にも必要か、②避難先での健康トラブル・食生活の大切さ、について食育改善推進員の方から講義を受けた。その後、ビニール袋を用いたパッククッキングを用いて、ごはん、減塩焼きそば、減塩豚汁、バナナ蒸しケーキの調理実習を行った。パッククッキングは初めての学生も多かったため、興味深く観察しながら取り組み、また味も通常調理と変わらない美味しさが実現できたため、大変勉強になった様子であった。

（2）「さくら保育園食育教室」

日 時：2019年12月～1月

場 所：さくら保育園（都留市田野倉）

対 象：園児

例年、保育園で食育教室を1日開催させていただいているが、今年度は生活環境科学系ゼミ学生がボランティアで保育園に入り、日々の園生活の中でより自然な形で、園児の生活と共に食育活動を行った。今年度も、さくら保育園の先生方と様々な形を模索しながら、食育をテーマに歌や遊びを取り入れ、楽しみながら栄養の基礎を学べるような教室を行う予定である。

(3)「のびのび興譲館クッキング塾」の参加

日 時：2019年12月14日(土)

場 所：いきいきプラザ都留

対 象：塾生(都留市内小学4～6年生)

参加人数：36名(小学生22名、本学学生11名、市役所2名、教員1名)

内 容：都留市が行っている「のびのび興譲館クッキング塾」活動は、単に調理の技術や知識を教えるだけでなく、地元都留市で作られている作物を知ること、昔からの食文化に触れることなど、多くの食経験を活動に取り入れている。この主旨を踏まえ、年間活動計画の12月分を生活環境科学系ゼミ生が計画し、世界の行事食として、季節柄クリスマスが近かったことから、ローストチキン(ドイツ)、ポテトサラダのクリスマスツリー(ドイツ)、イギリス式サンドイッチ(イギリス)、ブッシュドノエル(フランス)の4品を調理した。学生は、塾生の小学生に調理指導や、食文化的な歴史背景を教える食育活動を行った。

<今年度の予定>

毎年、ゼミ学生はこの食育活動を通じて、乳児から高齢者まで幅広い世代の方々との学外交流が生まれることからとても楽しみにしており、自主的に企画を立案し、当日に向けて練習を重ね、より良い活動にしようと切磋琢磨しながら取り組んできた。残念ながら2020年度はコロナの影響もあり、どこまで実施できるか未知数ではあるが、引き続き学生の前向きな姿勢を後押しできるよう、積極的な活動につなげていきたいと考えている。

(文責：平 和香子)

V-2. 谷二(やに)ラボ

申請代表者：学校教育学科 教授 山森美穂

協 力 者：学校教育学科 准教授 平和香子

テーマ：谷二(やに)ラボ ～小学校教員志望学生の科学実験に関する実力向上と小学生の科学への興味喚起の機会としての放課後実験教室～

【目的】

①小学校教員をめざす学生が指導的立場で小学生とともに実験をする経験を積むこと、②学生が実験内容の選定から安全な実験教室の運営までを行う経験を積むこと、③学生の自然科学の素養を高めること、④理科実験教室への参加が子どもの理科への興味を高める効果を

検討することである。

【概要】

谷村第二小学校で放課後に小学生を対象とした理科実験教室（通称「谷二ラボ」）を平成23年度からはじめた（27年度は山森の学外研究のため休止）。実験教室の内容選定や準備、当日の進行は学生が中心になって行い、上記目的①～③の達成を目指す。参加した小学生を対象に、アンケートやインタビューを行い、理科実験教室への継続的参加が子どもの理科への興味を高める効果を検討する（目的④）。同時に、指導的立場で参加した学生に対する効果も検討する。

【令和元年度の報告】

第1回は、植物染めをテーマとした。あらかじめ子どもたちにたまねぎの皮かくろまめのどちらを体験するかを選んでもらって、当日は染まりやすい絹地をミョウバン媒染で染めた。たまねぎの皮ははっきりした黄色に染まり、くろまめは控えめな紫に染まった。

第2回では、視覚的にインパクトのある実験として有名で、動画サイトなどでもとりあげられている実験を行った。この実験では過酸化水素水が分解して酸素ができる反応を急激に行い、食器用洗剤の泡をあふれんばかりに一気に生じさせるため、児童は安全メガネを着用し、反応をスタートさせる物質を入れる担当をつとめた上級生には白衣も着用してもらった。勢いよく泡が発生し、児童たちは歓声を上げていた。また、安全メガネや白衣を着用する必要性についても、児童たちはよく理解してくれた。

第3回では、血痕かどうかを調べる方法として推理ドラマやアニメでも登場するために知っている児童も多いであろうルミノール反応をとりあげた。この回では、1,2年生の部と3年生以上の部の2部制で行った。反応液をレバーや野菜の切り口に垂らすと、レバーに含まれる鉄分や野菜に含まれる酵素の反応を促進する働きのため、青白く光る現象を各班で観察した。3年生以上の部では、最後に、演示実験として、ヘキサシアノ鉄(III)カリウムを触媒とする強い発光反応を全員で観察した。

【令和2年度に向けて】

令和元年度は各学期に一度行うことができた。また、ルミノール反応では、全学年が6校時がない日に設定ができなかったことから、低学年と高学年の2部制で行ったところ、各部での時間がとれないためにかえって狙いを絞りこみ、それぞれの年齢層により即した展開とすることができて、児童側も大学生側も、得るものが大きかったと考えられる。今後もテーマによっては2部制を検討したい。

この原稿の執筆時点では、令和2年度の活動について、全く予定が立っていない。実施を具体的に相談できる状況になることを待ち望んでいる。

（文責：山森美穂）

付) 2019 年度 地域交流研究センター担当教員

竹下 勝雄	学校教育学科教授	地域交流研究センター長 共生教育研究部門（地域美術教育担当）
北垣 憲仁	地域交流研究センター教授	地域交流研究センター副センター長 自然共生研究部門担当
内山美恵子	学校教育学科教授	自然共生研究部門担当
福島 万紀	地域社会学科講師	自然共生研究部門担当
杉本 光司	情報センター特任教授	共生教育研究部門（地域情報教育担当）
小河智佳子	情報センター特任准教授	共生教育研究部門（地域情報教育担当）
鳥原 正敏	学校教育学科教授	共生教育研究部門（地域美術教育担当）
青木 宏希	学校教育学科特任教授	共生教育研究部門（地域美術教育担当）
山本 直紀	学校教育学科特任教授	共生教育研究部門（地域美術教育担当）
堤 英俊	学校教育学科准教授	共生教育研究部門（地域インクルーシブ教育担当）
原 まゆみ	学校教育学科特任教授	共生教育研究部門（地域インクルーシブ教育担当）
齋藤 淑子	学校教育学科特任教授	共生教育研究部門（地域インクルーシブ教育担当）
富永 貴公	地域社会学科講師	共生教育研究部門（社会教育担当）
鈴木 健大	地域社会学科准教授	まちづくり研究部門担当
山口 博史	地域交流研究センター准教授	グローバル交流研究部門担当
事務局：小林泰憲 権守望 渡部美由紀 巖岩亜紀（まちづくり交流センター・サテライト）		

2019 年度 地域交流研究センター運営委員会委員

鈴木 健大 広報委員長
 内山美恵子 学校教育学科
 古川 裕佳 国文学科
 OLAGBOYEGA, Kolawole Waziri 英文学科
 福島 万紀 地域社会学科
 邊 英浩 比較文化学科
 木下 慎 国際教育学科
 石川 和広 経営企画課長
 平井 勝典 市民代表（都留市まちづくり市民活動支援センター長）

2020年9月30日 発行

編集者 都留文科大学地域交流研究センター

発行者 都留文科大学
〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1
電話 0554-43-4341 (代)

印刷所 株式会社 佐野印刷
〒402-0052 山梨県都留市中央2-7-3
電話 0554-43-1611
